川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land - limon

The Senryu Zasshi

第四種郵便物認可
昭和廿六年三月一日發行第六種郵便物認可
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通巻二百八十六号

No. 286

三月号

春の窓口

——七面山とへとち——

麻生路郎

肉体川柳で賣り出した直原七面山君と「恋と女の句は採らぬ、自分でも作らず、己れを高う持してゆく」と云う小倉へとち君の主張と、この二つの問題をこゝに取り上げて見た。

一昨年の七月頃から昨年にかけて七面山君が、肉体川柳をさかんに発表したので、一つのセンセーションを捲きおこしたことは読者の記憶にまだ新らしいことだと思うが、この肉体川柳の発表に、非常に興味を持たれた柳人と、あんなものを発表するのは、川柳の冒瀆である。貴方もあれに賛成しているのかと、手厳しい詰問をうけたことがあつたので、私はそれに対して七面山君の肉体川柳は、末摘花とは確に一線を劃していると思う。肉体川柳だけが川柳ではないが、肉体川柳も又川柳であるとアッサリ答えて質問を打切つたと記憶している。

ところが、恋と女の句は絶体に採らない、自分も作らないと云うことは、そう単純に許容さるべき問題ではない。云うまでもなく、それは他人の自由を奪うからである。

聞くところによると、七面山君は、一月に岡山放送局から肉体川柳に就て放送しそうである。どんな放送が行われたのか私はその放送を聴取していないし、内容も聞かされていないし、恋愛小説は小説ではないと云い切れるものでもない。しかし、私は恋愛小説は書かないと云うことは、これも作家の自由である。

同一の論法で、へとち君が、恋や女の句は自分では絶対に創らないと云うのは自由であるが、選句の場合に恋と女に関する句は絶対に採らないと云うことは、そう単純に許容さるべき問題ではない。云うまでもなく、それは他人の自由を奪うからである。

所謂肉体川柳を専門に創るのは作家の自由である。恋愛小説ばかり書いているからと云つて、小説家としての存在を云云するのはおかしいし、恋愛小説は小説ではないと云い切れない。某君の話では巧く放送していましたが、一部ではあんな人に近づいてもらつては困ると云う声も聞きましたと云うことであつた。

一部の反対意見はあつても、それが専門誌えの発表であれば問題は軽くて済むが、放送となれば問題は少しく趣きを変えて来る。専門家間では「チャタレー夫人の恋人」を藝術的作品として取扱うが、社会を対象とする検察当局はこれを発禁処分に附するようなもので、専門誌で発表した句であるから差支あるまいと云う断定のもとに、放送することはいさかか浅見をまぬがれないこととなる。要は社会から誤解されなくてすむものは、誤解されないに越したことはない。

舟橋や、田村の小説が、社会に害毒を流すし、あんな作家に近づいたら何をされるか判らぬと云われても、舟橋や田村は自分の小説が賣れさえすれば生活には困らないし、そうした社会の悪評は何等問題にしなくとも生きていけるであろうが、七面山君の場合はそうはいかない。

肉体川柳が賣れて、それで生活が出来ると云う訳ではなく、身は警察に職を奉じているのであるから、誤解による人格的悪評は、類を生活に及ぼさないとは断言出来ないからである。

しかし、私はそれがために、肉体川柳を創ることを遠慮したらいゝとは毫も考えていない。

更によりよき肉体川柳を創るとしたら、それも作家の行くべき道ではないかと思つている。

三月号目次

表紙……山比種三郎

新川柳評釋百句
昭和の作品から(2)……麻生路郎……(六)

川柳原理(1)……福田山雨楼……(三)

リレー隨筆
生意気ざかり……渓夢助……(一四)

川柳を花火で揚げる
山蟻川柳大會……種瓜平記……(一二)

春の窓口……麻生路郎……(一三)

小説・將軍娘……(三)……山路閑古……(一八)

古川柳の一面……不死鳥……(一六)

不朽洞喫煙室……(一九)
先生御免……豆秋　一人二役……鮎美
電報……鮎美　パトン……山雨楼

或る日の句会……ド・Z……(二五)

★

不朽洞句帖……麻生路郎……(一四)

近作柳壇……麻生路郎選……(一四)

川柳塔……麻生路郎選……(一八)

課題吟「女形」……水谷鮎美選……(一七)

各地柳壇……(二〇)

動静……(二四)

不朽洞会から……(二三)

編輯室にて……(二四)

川柳原理

(1)

福田山雨楼

(一) 川柳の根本精神

1. 川柳とは何か

この質問に答えるには少くとも二通りの用意が必要である。初歩の川柳人に対する場合と川柳人以外の一般大衆に対する場合とである。後者に対するものは、路郎先生の「新川柳講座」をはじめ著書や講義も多いからこれに譲つて、ここでは川柳人に向つて——それも初心者ではなく相当川柳の道に年期を入れた、新進氣鋭の諸兄に対して所信を披瀝し、嚴正なる批判を期待したいと思うのである。

川柳とは何か。この命題は現役作家にはあまり興味はないかも知れない。何故なら川柳の本質を知り、川柳を愛好するからこそ川柳に手を染めたのであつて、今更開き直つてこう云う課題を究明する必要を認めないと云う者が多いだろうからである。けれども川柳本質への理解は内心自信があるようで、その実あやふやな場合が少くなく、十分わきまえているつもりでもいつの間にか行詰つたり、スランプに悩む例が多いのである。また川柳の歴史的、文学的社会的理解が漠然たる常識に止まつて、深く追求することを避け自得したつもりで漫然とすましている向もあるとゝ思う。若し川柳本質への近代的味到が足りないために、知らず知らず邪道に陥つたり正しいあり方を踏み外す場合があるとすれば、甚だ遺憾なことと云わねばならぬ。

傳統文学である川柳の本質を闡明するには、先ずその史的研究から始めなければならぬが、この点については多くの作家は先刻承知のことであるから省略して、主としてその文学理念からのべて見たい。

藤村作博士は「建國以來二千年。山を河を木を鳥を詠ひ続けて來た大和民族は、太平鼓腹の江戸時代を迎えて初めて大都会人的人事描写の詩を持つ事を得た。名づけてこれを川柳と云ふ」と述べられたことがある。川柳は実に民衆の手によつて樹立された最初の詩的労作であつて、世界における最も短少な詩型を誇るものの一つである。句の内容、表現が如何にも自由自在であつて、いささかの制約を設けず、どこまでも庶民、市井人としての俗腸をさらけ出した、大胆にしてユーモラスな生活意欲こそ、大衆詩の名にそむかぬ存在と云わねばならぬ。しかもその表現するところよく意表に出で、肺腑を衝き、人情の機微を穿つて、読む者をして共感同調の内に首肯せしむるところ、如何にも犀利、飄逸、尖鋭、辛刺をほしいままにする社会詩と云うべきである。

が、静かに川柳の根本精神を探求して見るならば、そこに解明され帰納されるところのものは、総括して「おかしみ」にあることが理解されるのであるっそこで自分は、川柳原理は單的に云つて「おかしみの詩情を表白する十七音」であると指称することができると信するのである。おかしみこそは川柳の根元を培養する土壌であり、川柳はおかしみの感情が開花したものであり、おかしみの心が疑固結実したものである。

次に川柳の社会的検討であるが、川柳は大衆の手で誕生したものであると同時に、社会的産物として常に現実社会と共に歩み、共に生きて來た短詩であることが理解される。社会の風俗習慣をはじめ、あらゆる事件、行事、不祥事、欠陥、裏面等の諸現象が、恰も反射鏡の如く、錄音盤の如くキャッチされて、仮借するところなく批判され、攻撃され、揶揄され、或は冷笑され、笑殺されるのである。この意味において川柳は社会の清涼剤ともなり、中和剤ともなり、また淨化剤ともなつて、その健全なる発達に短軀よく貢献する役目をも担うものである。このように歴史的、文学的、社会的意義と特色を持つ川柳の底を流れる、一貫した文学理念は「おかしみ」に要約されるものである。おかしみの詩情を基盤とした上に立つ傳統文学であり、これからも亦その制扼の中に発展する社会詩であるのである。これが川柳の根本であり不動の骨格である。

川柳おかしみの原理の正当性を裏付ける理論として、自分は幾多の文献、論述、例証を用意しているのであるが、ここには繁を避けて引用を差控える。ただ一言釈明をしておかねばならぬことは、恩師路郎先生がこれまで主張され、力説されて來た指導原理と、いささかでも軒輊する点がありはせぬかと云う事である。先生は一時暗い句を好まれたこともあるし川雑百号記念「川柳の夕」では「人間苦の藝術」と題して講演されたこともある。また近頃は人間

陶冶の詩と云うことをしばしば説かれている。先生の文章の上からは何となくおかしみの詩情からは遠い感じがないでもない。しかしそれは先生の書かれたものを軽く読み過すからであつて、明哲の底にある先生の眞意を誤りなく汲取らねばならない。先生の眞意は川柳を單なる滑稽視、駄洒落視、遊戯視することを戒められるの余り、常に川柳を文学する上の眞摯、純正なる態度を力説されて來たのである。だから選句に際しても、あくまで作者の個性を尊重し個性の良き芽をのばすように指導されつつ、川柳本來の詩情を盛つたおかしみの句を重視されているのである。このことは先生の編著になる「累卵の遊び」「川柳名句評釈」をはじめ幾多の句集に挙げられた。一句々々を鑑賞して見るならば、如何に先生がおかしみを解せられ、上乘なるおかしみの句を重んぜられているかが判然とするのである。また先生の人柄御性情も頗るユーモアに富まれ、正義や公憤のためには身命をも挺して健闘されるが、日常の御生活、家庭の御様子など拜察すると、誠に春風に接するが如き温容を湛えられているのである。このことは自分が在阪時代、編集その他の用件で足繁く先生の御家庭を訪問し、つぶさに体験しているところである。このように先生は生えぬきのユーモリストであり、且つヒューマニストである。先生の名句も心して味つて見るならば、その底におかしみ（但しここに云うおかしみはあとでものべるが單なる滑稽さか短見者流であると思う。川柳には笑いの句は多い。しかし笑いが川柳のすべてではない。必ずしも笑いの句が川柳の代表的なものでもない。笑いの句は川柳の通俗的な意味における外観に過ぎないのである。川柳には笑い以外のおかしみ、笑い以上のおかしみがあるのである。これ等については次節にのべることにするが、おかしみの淵源は実に古く、上代の日本精神の一つとして「あなおもしろ」が挙げられおり、中古における文学意識の中には「おかし」が美の類型として「あわれ」と共に尊重され、生活の中心をなしていたのである。近世の江戸時代に至つては町人文藝の理念として、「おかしみ」は中心的な傾向を示し庶民に翫ばれたのであつた。現代における複雑なる文学思想の中にあつて「おかしみ」は必ずしも主流をなしてはいないが、現代人の意欲に触れ嘱望の焦点となつていることは、ここに贅言を要しないところである。

不朽洞句帖

麻生路郎

この寒さに素足の若さうらやまし
女房に安請合をおそれられ
ではこゝでなどと別れて飲み直し
その利子を忘れて居たい酒なりし
飲んで來て万年床は淋しいね
一生の願い銘仙一反か
アベックの戻り林檎を買はされる
朝鮮の如く会社もつぶれそう

2 おかしみとは何か

おかしみの概念の中には滑稽、ユーモアの外、諷刺、皮肉、穿ち、機智、諧謔、洒落、揶揄、言葉の面白味、警抜なる着想、犀利なる観察、鋭い截断による眞実味、快感、自嘲等が包括される。更に不義、不正、不合理を不審がる観念、不潔、不行儀、不釣合、不似合、不可思議な現象も亦おかしみの詩情に映するものである。かくおかしみの範囲は廣汎であり深遠である。美学的には有情滑稽などと云つてその美意識が指摘されているが、おかしみは藝術的に生かされた場合美に直結するものである。

故頴原退藏博士は晩年の論述「川柳文藝の特性」の中で

百両をほどけば人をしさらせる
果し狀泣かなくと墨を磨り
印判の服紗で母は眼を拭ひ
南無女房乳を呑ませに化けて來い
俄菩女母は涙で無名口

の如きは、果してこれが滑稽だと言ひきれるであろうか。むしろそこには笑と相反した感じが味はれるのである」とのべられ「川柳が滑稽の文藝であるとの考へは必ずしも正しい見解だとすることも出來ない、川柳を滑稽の文藝と云う概念の下に総括するのは不当だ」と言われた。なるほど滑稽とか笑いとか云う言葉で規定しようとすれば、川柳の領域は狭いものとなつてくる。しかし前の例句を味わえばわかるように、これらの古川柳はおかしみの句として受取るならば正当にうなづけるではなかろうか。即ち人事葛藤のおどろき、緊迫感、悲劇の客観苦境のべつ見等この十

男女両性に作用する
プレホルモン
錠剤・射注下皮
塩野義製薬
SHIONOGI

七音の美事な截断によつて、生きた描写のおかしみが感ぜられ、測隠の情と共に思わずおかしみの感情がこみ上げてくるのをどうすることもできない。これは一面には川柳と云う表現形態が齎らす魔術かも知れない。しかしもつと根本的には、人間の心の奥底にすべてを客観視し、距離をおいて眺め、味わい、考える本性があるのであろう。きびしく、はげしく、鋭く描写されていればいるほど、冷静な客観的態度がわき起つてくるのである。これはむしろ生理的、心理的生活現象であつて、倫理感や利害感を超越したものである。しかもこうした客観的態度は最後に何等かの結論を求めて、解決を與えようとする。知性と感性にうつたえて判断をつけてしまうのである。川柳の観察が概ね正鵠を得ているのはこうした心理的経過をたどるからであつて、おかしみの哲学はこの辺に胚胎しているのである。そう云う深いところに立脚した川柳であればこそ、永久に生命があるのであつて、徳川時代一世を風靡した狂歌が滅亡を見たのと比較して、川柳の根底が如何に深遠なものであるかを知るべきである。

おかしみは更に明るさ、高朗さ、大らかさ、おどろきの事象をも包擁するものである。口を開いて笑い出すほどのことではなくとも、何となく快濶浩然の氣が起り、胸のすくような爽快の情を覚える場合、また驚異を感ずる場合、川柳は逸早くその足元に忍びよつて來るのである。

路郎先生の名句「君見給え菠薐草が伸びてゐる」は当時問題句、難解句であつたが、今ここにのべるおかしみの範疇から味解するならば、読者は釈然としてうなづくことができるであろう。即ちこの句は笑いでもなければ諷刺でも穿ちでもなく、そう云う要素とは一線を劃して、自然の持つ大らかさ、きびしさをその一かけらから発見したおどろきにうたれるからである。しみじみと教えられるからである。單にこれをおかしみの句だと説明したのでは、誤解されるおそれがあるが、おかしみの懐の廣さを知る好個の愛誦吟と云うべきである。

このようにおかしみの文学は廣い振幅をもつものであるが、川柳はその中の尖兵として十七音形態を固守するものである。同型文学の俳句は、季題、季感を基調とした花鳥諷詠の詩として、別の分野をゆくものである。（近代の生活派、人間探求の傾向については後述）川柳はおかしみの文学の俊敏なる選手である。

おかしみと云うものは多くの場合、人間に密着し、人間の影、或は人間の錆のようなものであつて、川柳味即ち人間味とも云われるが、全く人間臭いところにおかしみはひそんでいる場合が多い。また人間生活の俗つぽい環境の中にもぐつているものである。よく俗の眞と云うことが云われるが、俗の眞実を追求するところにおかしみの川柳は瓢乎として姿をあらわすのである。

人間にはおかしみ以外に尊さ、醜くさ、強さ、弱さ等があり、複雑微妙をきわめた生態であるが、おかしみの原理はその間に伍して、永遠の秘密境、盲点を摸索し暴露しつつ、人生に潤滑油を供給してくれるものである。

顕原博士は先年各界痛惜の中に永眠されたのであるが、その直前、時恰も路郎先生の還暦記念川柳大会に、絶筆とも称すべき一書を寄せられた。即ち「人は川柳を滑稽文学と思つています。又喜劇はつねに悲劇より劣つているかの如く先覚しています。しかし少くとも、日本文学の歴史を通じて見ますと、新しい物が興ろうとする時には必ず滑稽性とその著しい特色としてもつています。言ひかへると文学の滑稽性が常に新しいものを創る原動力となつているのです。このことは、日本文学に於ける滑稽性の非常に大きな、且つ深い意義を示して居るとおもいます。実は私はこの意義をいささか闡明したいと思つている次第です。そうして現代川柳がやはり、その深い意義を発揮すべきものだと信じています」実にこれは博士の川柳界に対する遺言となつたのである。われわれは博士の言葉を服ようすると共に、滑稽ユーモア文学より更に抱擁力のある、おかしみの川柳原理を確立し、その成長を斯せねばならない。

（未完）

或日の句會

紅白の句相撲があつて、勝句を読上げると、一隅から「あかのしろ」と云う声がした。採点者が紅か白か採点に困つて、この筋から西の方ならあかですがと云うと「エヽあかの紫郎です」と相変らず答える。しろと云うのが雅号と判ると、会場がわれる程の爆笑が起つた。朗らかなことである。

（S・Z）

麻生路郎著　水武書房版

好評嘖々

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなもの」から説き起して敎むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版　二一二頁　定價　一〇〇円　送料　金十二円

取次御注文は　大阪市住吉区高見代西五丁目二五番地　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雜誌社

新川柳評釋百句（II）

昭和の作品から

麻生路郎

空は海のように碧い。そこえ大きな柘榴の樹が聳えている。そしてざくろは思いきり大きな口をポカリとあけている。赤い実が今にもこぼれそうである。自然は美しい。この場合、作者がざくろえ呼びかけた心持ちには同感が持てる。川柳としては珍らしい自然觀照の句である。

出しやばりが燗のぬるさを云いにくる　（牛歩）

何処の酒席にでも、こんな男が一人ぐらいは居るものである。実際は骨惜しみをせぬ親切な男なのであるが、いささか安ッぽく取扱れる傾向があつて、一座からは出しやばりの名を頂戴しているのである。燗のぬるさを云いに來る出しやばりはいゝ意味の出しやばりであるから、少々出しやばられても不愉快ではない。この句には古川柳にでもありそうな味と調子を見せている。

大空の下チヨボ〳〵と人の住む　（海棠）

果てしのない大空、その下にウヨ〳〵とうごめいている人間どもを、チヨボ〳〵と觀たところに作者の達觀した人生觀がうかがえて面白い。一読してユーモア味を感じるが、作者はすこしもおどけてはいない。人生に対して眞摯であり生眞面目である。

終電を氣にして料理殘して來　（草右）

郊外に住んでいると何かに不便である。一寸街え出ても終電が氣になる。ブラットで終電のテール・ランプを見送る氣持ぐらい、いやなものはない。どんな御馳走が出ても終電間近になると、又しても腕時計を見るのである。あと十分しかないとなると、折角の料理も、もう落ちついて喰べてはいられなくなり、半分殘したまゝで引揚げてしまう。そうした心理狀態を、巧みにキャッチしていると思う。辛うじて終電え飛び乘り、ヤレ〳〵と腰を下ろした姿までが、髣髴として眼に浮ぶところにこの句のいのちがある。

腹が見えるよ柘榴かげんしな　（朗笑）

屈辱を耐えるこめかみ脈を打ち　（安夢）

どんな屈辱を與えられたのかはこの句から判断することは至難である。余所目には論ずるに足らんような軽微な侮蔑であつても、侮蔑された者にとつては強力な屈辱を感じないものでもない。しかもそうした屈辱を耐えしのぶと云うことは、仲々に難しいものである。この句の場合、かなり神經質な性格の持主であることが想わされるし、自己の弱さ、微力さを肯定しているようでもあるところに複雜な味が出ている。

畫風呂へ切腹するよに坐り込み　（無聖）

ガランとした畫の風呂。でッぷりと太つた巨軀でのんびりとゆつたりとかまえ込んだところは「自由学校」の五百助そッくりの男だと思えばいゝ。イヤに落ちついているのを「切腹でもするよに」と形容したのである。比喩の面白さである。

正直に話し借金ことわられ　（快夢起）

こんな話がある。部下が遲刻して來たので、みんなの手前、バッを合わしてやろうと思つて「あたまでも痛かつたのかい」と訊き質すと、「イヤ、違います。徹夜で麻雀をやつたんです」と告白する。上役はそれを云わしたくなかつたのである。借金の申出に対しても、あまり正直に話されては貸してやりたくても貸せぬ場合があるものである。穿ちの句。

亭主もう默つて針を拾うなり　（桑南）

「オイ、針が落ちてるよ」「ハイ、すみません」と口では云うが、てんで問題にしていないようである。こんなところは男の神経と女の神経は違う。男は針がつきささつて外科へ走るところまでが、いろ〳〵とあたまに來るが、女は突きささつてからでないと騒がない。

ハゲ位い嫁きます別莊自家用車

（史　球）

せち辛い今の世の中で、男がよくて金があつてと、のぞむことは木によつて魚をもとむるの類だぐらいなことは娘の方がよりよく知つているのである。ハゲぐらい、イヤ片脚ぐらい無くても、物質さえあれば問題ではないと云うのである。戰後派の女性が如何に現実的であるかがうかがえる。そのくせ、夫と一緒に外出する時には、一番先きに夫の頭に帽子を載せてやることを、忘れない女かも知れないと微笑を禁ずることが出來ない。

芝居ではあらうが家出ほつとけず

（芳　泉）

夫婦喧嘩が嵩じて、妻がとう〳〵家出をしてしまつた。ホンキで家出したのではなかろうが、「死にます〳〵」と云つていたのが、又しても氣になる。こゝまで來ると、男は急に弱くなる。心あたりえ人をやつて探がさせる。そういつた人生行路のいきさつを、巧みに描写していると云えよう。

すかしては注ぎすかしては注ぐ一人旅

（狐　浪）

一人旅の車中の無聊を慰めてくれるものには酒がある。車窓の風趣を味いながら、チビ〳〵と飲んでいると、いつしか時間と云うものを超越してしまう。人生、この時ぐらい、酒がのめると云うことの幸福を痛感することはあるまい。すかしては注ぎすかしては注いでいる酒呑み心理がうまく詠まれている。さびしくもあり、樂しくもあるのが一人旅の眞の味かも知れない。

抓リ合いして愛情を交換し

（美　秋）

嗜虐性と云うほどでもないが、若い夫婦の愛情は触覚によつて交流される場合の多いことは、あらそわれない。抓られたあとが紫色になつていると、そこえひそかに接吻を以て愛撫することさえ稀れではない。そこを掴んだのがこの句である。「し」止めの句であるが、所謂「し」止めの陷入り易い稚拙さがない。

氣前よく腹の痛まぬビール抜く

（梅　里）

主客二人、ビールビンの林立。「もうこれ以上ダメです」と固辞しても、「ダメなことがありますか。ビールの一本や二本、すぐに醉がさめますよ。残つたら残しておいて下さい」とムヤミに氣前がいゝ。これも自分の腹が痛まないからだとは皮肉な觀方である。しかしそこには動かすことの出來ない眞理がある。

妾宅の猫流し眼で人を見る

（十九平）

妾宅の猫の存在は鼠をとることではない。常に二号さんのペットとしての存在なのである。二号さんの一挙手一投足は猫の一挙手一投足でもある。作者の觀察の鋭どさが、斯うした句を拾いあげた訳である。

もう少し寢てゝと食事準備中

（日潤子）

明日は日曜だと、いささか氣をゆるして寢たためでもあろうか、細君が床を離れるのも、いつもより遲かつたのである。「今起きても食事が出來てないのよ、もう少し寢てゝ」と云う甘い言葉が、台所から聞えて來る。そうなると男と云うものは、人生の幸福を一人で買い占めたように、もう一度ふとんえ深くもぐり込むものである。新世帶風景の写生句。

（つゞく）

大阪市　武部香林

社会的地位を女房に邪魔がられ
大空へ旅客機だけの世を希ひ
ぼやくまい神様さえも食えぬ世に
大晦日われたじろがす硝子拭く

奈良縣　上田翠光

豊かさは毛糸づくめに子を育て
成人の日のよろこびも親と子の

平塚市　木村孤浪

ちつとしてゝも何とかなるよな氣がする
わが家に寝てゐたので先づ安心し
暖房ありとて窓を画き雪を画き
アベックは出て四五駅は無口也
二本目で冷えた豆腐の屑も食ひ
寂しさは岡の河童で今日も暮れ

横浜市　福田山雨楼

ご近所の細君世帯やつれして
政党をまつまでもない後手政治
ヤミ屋したサラリーマンで愛想よく
新聞があるから世間悪く染み
禿げたのに帽子かぶらぬ人床かし

池田市　戸田古方

聖人といわれて淋しがりもせず
十二月とんま愈々とんまにし
金まわり胃腸ぐすりに親しませ

東京都　前山北海

外人の日本人感

スポーツを雪辱などと騒ぎ立て
元も子も飛ぶとは知らず赤に媚び
孫の守ハワイの土と肚を決め
千円札はや無雑作に数えられ
微祿したかて帝塚山よう離れへん
帝塚山でんねさよかと愛想よし

布哇　内藤草一郎

賣地札抜いて廣ろ〳〵朝の空
大きな事云へど二号も置けはせず
だんまりで飯を盛つてる痴話げんか
迷ふまい男振りより金にしよ
シガー手にみじめな家並見下ろされ

尼崎市　水谷鮎美

映画「無防備都市」

愛の瞳をしりぞけてゐるスパイの瞳
神父いま神の偉大に泣くー骸
拳銃は神父の頭脳つらぬきぬ

歌舞伎「帰雁偲面影」

餅花の下夕霧を抱きしめる

「大石最後の一日」

黄昏れて鐘もろともの生命也

「義経千本櫻すし屋」

母親をだましあはれに泣く権太
笛吹けば惟盛さまがお出ましぞ

京都市　村松夢裡

某お茶屋にて（二句）

氣のおけるお客にされてほつとかれ
いそ〳〵と迎へてくれてむさい部屋
小便をこらへ雰囲氣みだすまじ

東京都　宮田不二

上方弁聞けば商賣しとうなり
追羽子へワンオールとは昭和の子

大阪市　福田妄夢

薄情なお方のための夜なべする
生れたり死んだりとにかく單調さ
一姫の絵本は去年買うたまゝ

大阪府　西尾栞

四十の或日の恋は落葉踏む
化粧なをす後姿へ喫ふ煙草

大牟田市　高田抱逸

正月をビンゴの声がかき乱し
市議になる心を捨てず年賀状

布哇　市岡暁舟

呑める口牧師の横へ坐らされ
冗談も云はず厳たりオールドミス
今日こその大賣出しへ酷い雨

米子市　三鴨美笑

またしてもだまされそうな氣の手形
どつちみちくれた粗品だ貰うとこか

佐賀縣　松野えいを

落書の壁へ夕陽の惜しみなく
ストリップのビラ赤々と夕陽受け
猫までが火鉢へ顔を揃えたり
西鶴の伏字も楽し寝正月
競輪へ今日は風速二米
赤字なほ続け暖簾に誇あり

大阪市　市場浚食子

十二月つらいお通夜をしに出掛け
税金の足しにまた〳〵店を貸し
前と後に世辞を聞き〳〵靴すべり
お正月までの命の雞が二羽
案山子また納家の二階にほり込まれ
経験と年効万年副主任

岡山縣　福島鉄兒

大晦日人の出られぬ雨が降れ
男なら誰でもよいと云う女
差入屋の火鉢冷たいものと知り

岡山縣　直原湖月

別居生活へ恋人の様な夢をもち

岡山市　藤本茶々

姉の方貰つてくれとも言えないで
花賣りのふるえるを見て買過ぎる

大阪市　塩浜一路

トンド燃え子等の世界は合唱し
泣かぬなりあれが知性と言うものか
思惑が外れお祖は密柑だけ

京都市　谷内一草

君ありと思ひて生くるいのちなり

ショー翁死す

その皮肉墓の中まで持つて行き
教室の威厳も消えて隠し藝
安物のヒューマニズムはやめとこう

兵庫縣　榎南夏六

鼻先でフンと女強いなり
御苦労さん〳〵と使はれて
遊んでる様にワテ恋をしてまんね

大阪市　伊藤迷宮

療養所一分の熱が話題なり
想像を逞しくする乱れ髪

岡山縣　高山朗笑

七八ツの心で母に巫山戯たし
拳骨もはずれて見れば口惜しい

岡山縣　杉山一貫

万才が云いたい様な初日の出
大望は遂げたが妻に先立たれ

岡山縣　横部牛歩

來客にどぶの匂いを感ずかれ
米俵二日土藏に居つただけ
又しても借りた羽織の紐がとけ
ケースからやおら出したは手卷にて

岡山縣　服部十九平

棟梁の手拭何時も新らしい
失業のお隣朝から風呂をたて
一人子があつて避姙の話もし

岡山縣　大森娯句樂

長男も年始けなげに酔ふて來る
まだ生きて御座る御慶の隠居部屋

尼崎市　長谷川三司

猫帰り來たらず

猫家出今宵の月は寒むからう
釣ばなし沙魚三匹のお裾わけ

西宮市　田辺由布

着て喰えて慾な手相を見てもらい
金ヘンに縁なく今日も土はこび
ネバー好きなんてじらされつかわされ

大分縣　桑原表情

簡素化をすゝめて仲人断わられ
花嫁もお諸がすきで波立たず
山の温泉へ療治にゆけぬ賀狀書き

熊本縣　成瀬月仙

日本の春は私服で明けてくる

兵庫縣　若林草右

千億が灰になる記事二三行
招き猫お医者も欲しい金詰り
産制を嘲ける様におむつ干し

大阪市　足立春雄

冗談が座を白けさす性格の
改札ロライフで肩をたゝかれる

大牟田市　中村五醉

宿醉に苦しむ程の果報もの
死にたくはなし肺を病むベットに
鞄鞄と呼べば女房が返事する
サヨーナラ夜汽車の窓の露に書く

熊本縣　有働芳仙

余命なき生命は生命恋は恋
吹殻の山に嫉妬が芽生え出し
性教育雄蕊の花粉から始め

岡山市　大西迷窓

洗濯の夜が淋しい共稼ぎ
十字架の映画を好む妻を持ち

岡山市　延永忠美

誰れに似たのんびり過る兒も一人
十幾年いまだに帰ると云ふ女房

大阪市　米田孤舟

愛の手を拒んで地下で生きる群

松山市　前田伍健

座談会理窟婆アが白けさせ
天皇、吉田首相よりも、おほめにあづかつた伊予の篤農少女
表彰え地を見つめてる土居良子

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
45錠入
大阪・武田藥品工業株式會社

奈良縣　飯降白香

親孝行貧乏でないとほめられず
赤字赤字というて臍くりし

奈良縣　西辻竹青

督促狀ヒヤツとした頃懐しい

山口縣　長野井蛙

病院へ一升壜は別な用
うちだけが墓場のような寢正月
聞かせたいくせに一度は辞退をし

吳市　林野甦光

藝なしはのべつ幕なし猪口を舐め
恐しや何十万を借りて越し
一通り理窟並べて靴をはき

京都府　間島青丹子

次女出生

帰るのを待つてたように產氣づき
父さんと寢る正月をうれしがり
はんば物買つてる肩を叩かれる

大阪市　上田春柳

スナツプ屋

ピンボケの春の顏をば撮りにくる
風のままお稻荷さまへ初詣り
胎動の一針一針が幸福よ

大阪市　麻生梨里

泣けば済む涙と見えし我が涙
女なる悲しみおんな酌をする
わたしも女妓の握手淋しく見
或日蝶々になりたい空の色
あゝ酒さけの中なる人ぞ悲しき
死にますと書いた手紙の無駄になり
昨日は死ぬ氣今日はピロード買いたがり

大阪市　友淵貴山

せめてもの新らのネクタイ松の内
藥屋の白衣に醬油の型があり

布施市　森下愛論

引込思案恋人をまたとられ
流行を追へる生活をさげすみて
働いて喰うよろこびの秋刀魚なり

大阪市　大西柳堂

酒の瓶孫がかくせば皆笑い
乳母車近所の配給みんな積み

大阪市　太田良子

醉えば出る〳〵春青の唄であり
御主人があるんですかは恥しい
着飾つて〳〵待つ我橋
得心のゆくまで云えとすまされる
五分間だけ待つてゝとお化粧し

尼崎市　靜岡忠八

お年玉欲しそうにして子が遊び
年賀から帰りお茶漬欲しくなり
元日に來る約束の友は病み
ボーナスに女房の慾は足袋を買い
餅をつく音賑やかな兩隣

岡山縣　直原七面山

二三年待とうあの娘は十五六
四十で娘の側へ掛けたがり
今日も亦同じ言葉で口說かれる
未亡人世間を言ふて煮え切らず
間違ひと言へぬ子供が生れて來
乙女フト乳房の張りに驚きぬ
スカートの端で拭いてるサングラス
仲人が來れば娘は外出し
海水に行くスカートは下駄を履き
轢死体右手に残る子の土產

宇部市　上林粗影

善人にされて顧問は齡を拾ひ
こぼれるは萩ハイヒールの肉体美
炭を切る父の処だけ陽がこぼれ
ひるがへつて考れば侵略者ばかり

大阪市　西森花村

賣喰ひの棚はだん〳〵廣くなり
消防のサイレン星の降るやうな
くたびれた夫とダイヤのきらめきと

鳥取市　河村日滿子

呑助の女房ですわとうまい口
入れ替えた心に貯金帳あらた
明けまして僕も四十のおつさんか
流行歌心の歳は老いて居ず

兵庫縣　家沢薺花

氣変りと知らずすねてるなと思ひ
過去帳にあり〳〵知れるやもめ筋
見る方が大根洗ひを冷めたがり
あの世とかを一ぺん見たいなと思ひ

滋賀縣　黃瀨美秋

勉强の姿勢を寢床から叱り
泊り客佛間に寒う寢さゝれる
無理矢理のキツスそれからすゝむ恋
役人も巡査も女も左行く

岡山縣　藤本滿年

わが街の迷路ペペルモコに似る
停年の椅子座布團の綿が見え
許されぬ恋へ火口が待つて居た
取つときの切札心細くなり
遺訓など守つて居ては生きられず

熊本縣　西口如川

百万と言はずコツコツ貯めなはれ
皿みんなあけた今宵のよい氣嫌　名古屋市　吉田水車

大都会費え費えと言う仕組
端然と募金の勇士脚が無し
白竜さんへ行く妓に会うた冬の朝　大阪市　須崎豆秋

爪伸びたまゝ元日となりにけり
電線に凧がぶら〳〵として暮れる
刑務所がひと足先に餅をつき　大阪市　竹内湖花

水盤へもう元日のちりが積み
ペン先の嘘を信じて嫁かずゐる
子を抱いてゐても昔のひとを恋ひ　兵庫縣　北川春巣

初詣（高砂神社）
名松へカメラがほしい陽が当り
書き初めに大きなことを書いて見る
胃散ならあるてふ博士邸で酔い　奈良縣　尾崎方正

賃上げえ騒ぐ若さの欲しい今
酔うてなほえらがり同志わめき合い
うか〳〵と年が逝くなり大掃除　下関市　櫻川不水

戰争かあゝ空を見よ空を見よ
算盤のまゝ元旦へつき当り　大阪市　木下幽王

大みそか家は半分建つたまゝ
ステイションまではアベックつゝましい
図太さも堂に入つてる儲けてる　鳥取市　中島鉄洲

到來の鯉先づ水に放つとけ
六十日の手形貰つて春迎え
箸紙え去年の墨の歪みよう　大阪市　水谷竹荘

恋捨ててまで出世がしたいのか
恋敵女のきげんばかりとり
氣にさわることばかり言う恋敵
生活の差が友達とも言えず　下関市　弘津柳慶

子の留守の間に兎賣られたり
故郷から正月に孫をかせと言ひ　鳥取市　杉谷湖山

看護婦の今日は恋人めいて呉れ
祈る氣の起る朔日十五日
どこえ行くお米か馬車にトラックに
湯豆腐の沸りて雪の音を消し　八代市　佐野卜占

大穴も当てたが結極家も賣り
春の宵知らぬ女に近寄られ
苦労性ですなと易者無表情　兵庫縣　小沢史葉

逆境に立てばやつぱり強い父
飲めば又あやまる種が一つ出來
雑踏を眞直ぐ歩くニユールツク　兵庫縣　小西無鬼

人様をたんと泣かして家を建て
脚の線鹿にも似たりニユールツク　布施市　糸本醉月

餅つけば税務署ヌツト顔を出し
新築の長生院を寒う見る
師走でも夜明け靜かに明けて行き
代用食しても犬飼う未亡人　岡山縣　山分淑郎

花活けてくれる部屋借りうらやまれ
女学生キツスやつぱり待つていた
腕時計合つてゝ二人呑み直し　大阪市　大西野介

いき彈ませて朝の職場に飛込んだ
肋骨がキリストに似てゐる痩せてゐる
人形のすなほに我に抱かれたり
ユダ思ふ日よバイブルの手に重し
言ひ勝つて唇さむきシガレツト
われを繞く煙はさぞや蒼白し
颱風の唸りの中の唇と唇
カタコトと去つた義足の冬の客
わが影を轢いてゴウゴウ貨車去りぬ　高岡市　山根白星

飯三度喰べる落目の松の内
いとはんは屋号の傘が氣に入らず
落書のやうには二人添えず居る　大阪府　種瓜平

一杯の酒激情へ堰をする
隙間風母は背にうけ添寝する　大阪市　渡辺孫拙

行儀に坐る靴下の孔
スラぬ筈往診鞄が臭ふなり
平熱となつて往診得意なり　大阪市　福島正則

二号三号成金の未だ二十才代
一現へチツプ不安なマツチする
ノーチツプ自分で扉押して出る　大阪市　冨岡淡舟

鉋釘小さき理想を創造す
北風の吹く夜の母の咳はげし

山焼の句を選する生先郎路
阿万万滴氏撮影

川柳を花火で揚げる

山焼川柳大會

第一會場　奈良公会堂

第二會場　若草山山麓

一月十五日（成人の日）に奈良縣観光課・奈良市観光課・奈良市社会教育課・川柳雑誌社共催の川柳大会を開催したい。句は各地柳壇に発表し下に掲載する。

冬の陽に奈良公園は冷え冷えと輝いていた。しかし、俟つぼい陽春の頃より遙かにさびた色合いに落ちついている会場に当てられていた興福寺五重塔を目指して三々五々柳人の足はなよなよと依心傳心にすぐわかる。

もう誰やらが暖いところで冗談を飛ばしている。

瓜平＝「山焼きの由來はどこからきたんかいな」

正則＝「俗説かも知らんが、興福寺と東大寺の領地争いから若草山を焼いたそうやが」

芦穂＝「しかし山を焼く前に春日神社の神主さんがお拂いするそうやが」

瓜平＝「坊主と坊主の鉢合わせに神主さんが出たわけかな」

芦穂＝「それから仲裁は時の氏神ちゆうことになつたんやろ」

香林＝「鹿が見えへんな」

正則＝「写眞屋が飼を與えて離さんのや」

瓜平＝「鹿を買收してんのやな」

哲水＝「あそこに洋装の別嬪が彼氏を待つとるぞ」

文蝶＝「あれは九州から佐野さんの令嬢利江さんがはるばる來はつたんや」

皆＝「こつちへいらつしやい紅一点さん」

ところへ泡を喰つた猿みたいに愛論氏がやつて來る。

愛論＝「会場は公会堂に変更したそうですさかい行きましよう」

小松園＝「興福寺はもう降伏しとるさかいあかんのやて」

ぞろりぞろり、松並木を行く。写眞屋のおつさんは芋をきざみ、牡鹿、牝鹿が日溜りに眼を細めて群れている。

公会堂の門へ來る。

〝日本人入るべからず〟

一同＝「ギョッ、ギョッ、ギョッ」

瓜平＝「ボク、サコクチン、タカラ、カマヘン」

と反りかえつて入る。会場には既に生々庵、翠光両氏が轉手古舞。公会堂はGIさん達のホールになつているが、暗く冷たいので、誰言うとなく、

「こゝがええ、ここがえゝ」

と会場そつちのけに宏荘な庭園へ出る。戦前のように鶴の放ち飼いこそないが、芝生に飴玉のような鹿の糞が散らばり、ポカポカと暖い。松の梢からポンポン景氣よく花火が打揚げられている。

進駐軍の占領物だが、そこは世界的を以つて任する川柳人のこと、特別の計らいと心臓に、寝そべつて句作に夢中だ、ああ、東大寺の鐘が鳴る。鳴る——五重塔、芝生、鹿の糞、鐘の音——兼題そのまゝの雰囲氣！

哲水、瓜平「えゝ、お茶、お茶お茶はいかが」

一時十五分——時間は遅れたが、用意万端不行届が却つて、青天井の下で、野趣に富んだ句会となつて午前十時開会される。

進行係の香林さん曰く、折角の計らいですから、煙草の吹殻に注意して下さい。とんでもない山焼にならぬよう」

開会の辞　上田翠光氏

挨拶　奈良縣観光課長　竹下晴氏

〃　奈良市観光課長　橋本德三郎氏

〃　市社会教育課長　中島富三郎氏

〃　川柳雑誌社主幹　麻生路郎氏

講演　川柳とヒユウマニズム　飯降梅子女史

披講（兼題）

「案内人」　須崎豆秋氏

「名作」　北川春巣氏

「釣鐘」　中島生々庵氏

「神鹿」　高橋月南氏

「芝生」　片岡つとむ氏

「土産」　上田翠光氏

講演　山焼について　郷土研究家　高田十郎氏

高田氏の説明によつて漸く山焼の眞相を聞かされる。両方の寺の爭いから七大寺の坊さんが集つて、木の繁つていた山を焼き拂つたとゆうのが一つ。化物が出たので焼いたとゆうのが一つ。恋人同志の亡霊が逢引をやつたので、妬き餅で焼いたとゆうのや、其の他に沢山ある。

しかし、眞実らしいのが少く、結局は農業の開けていなかつた昔では、山を焼いて肥料をつくり、そこえ樹木や野菜を育てたことは現在も古老達が言うていることで、この風習が若草山にのみ残つたのであろう、とゆうことに大体民俗学者達の意見が一致しているようである。只今の山焼きは明治何年何月とわかつていても古い山焼の始りは、蛸やサザエのようなグロテスクな物を誰が喰いはじめたかわからぬと同様に判然としない。

高田氏一流のユーモアを交えた由來や三笠山の名称について一席終る。

抜講（兼題）

「猿沢池」麻生葭乃女史
「奈良の街」本多溪花坊氏
「五重塔」藤本蘭華氏
「注連縄」椙元紋太氏
「山焼」麻生路郎氏

賞品授與

逆順〈十八位より各選者筆、色紙、短冊

第三位（川雀賞）家沢 蕣花氏
第二位（市長賞）服部十九平氏
第一位（知事賞）田名部修三氏

第一会場閉会の辞 戸田 古方氏

川柳空を行く（若草山にて）

風変りな青空川柳大会が和氣靄々のうちに終つた頃は、もう日も翳つて寒氣が身にしみる。

「さあ、これから日本一の大きいトンドにあたりに行こう」

打揃つて第二会場若草山々麓へ赴く。

西日をまともにうけて若草山は一面橙色に映えて臥牛のように拡がり、沢山の人が蟻のように這い上つて、黒、赤、青が点々とうごめく様は美しい。

芝生の上の川柳大會（公会堂）

五時半頃より、当日の呼び物となつている、川柳花火を打上げ、何万の観衆の頭上へ落下傘に吊り下つた第一彈は、成人の日らしい、麻生路郎師の句。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　路郎

で引き続き

飲んでほしやめてもほしい酒をつぎ　葭乃
大佛の鎧杉を抜け杉を抜け　五葉
春日道鍾足さんに出會ひそう　路郎
甘く見た若草山に息が切れ　生々庵

等の名吟が、遙かの空中に雄姿を靡かす。

この奇抜な催に、観衆は大喜び。川柳が青空高く大見得をきつたのは、けだしこれが初めてであろう。

山焼を待つ間に雑吟も行われる。

日がすつかり西に沒した頃、山の中腹で、日本古來のインベ花火と称する、竿竹の先から火を吹いて地面まで火の粉の落下する花火——三十本が勇ましく放たれ。六時十分、既に暗闇で山の所在がわからなくなつた中を、奈良全市の消防團が、トンドの聖火から火を移した松明を手に手に三隊に分れて、山麓を進み三方より一斉に火を放つ、同時に、六つの仕掛花火が、次ぎ次ぎに点火され、晝を欺く光と、頭上で炸裂する打上花火の壯観は眼を奪い、溜飲の下る痛快なものだつた。

山は天を焦すばかりに、上へ上へと焼え登り、闇空に陵線を劃然と現す。

「不動明王が現れそうだぞ」と誰かが叫ぶ。全山火の中に仕掛花火と打上げ花火が五彩の光を乱射する。

巨大な火の竜が大暴れにのたうち廻つているようでもある。

この日本古來の行事に溶け込んで、大衆と川柳を直結することの出來得ることは、関西作家の倖ともゆうべきで、この有意義な日を記念するため、若草の余燼をあとにした柳人有志は、朝日軒に於いて懇親会を挙行し、遠く各地から参加された方々と、交歓の宴を催した。

（絵と記事）種瓜平

一品料理と生そば
グリル 芝鶴
上六キヤピトル映画館 東三軒目

近作柳樽

路郎選

行き倒れではなく土方の雲寢ですキス位ならと女に際があり　廣島縣　黒本　芳泉
ともかくも溺れる者の契約書　同
多産系などと笑つても居れず　同
自惚れの女男を不幸にし　同
奥サマにされて言葉が改まり　同
夜だけはその賢婦ぶり止めて欲し　同
朝夕の合掌の指ひからびて　長崎市　山崎　夢路
残り火に今日の疲れの手を翳し　同
やすものを女房樂しく縫つてゐる　同
盃の底に智性のもろき日の　同
拔けられますつい入り込んだ宵もあり　同
動乱を遠く置屋の道成寺　同
君恋しかくまで旅の長ければ　徳島縣　廣瀬志津雄
貴方だけなど言ひつれど次が待ち　同
寒椿　昔の恋も忘られず　同
死んでいる人に遠慮がいるものか　同
おでん十円燒酎四十円が無く　石川縣　那谷　光郎
椅子よせて出しやばるだけの婦人会　同
病む身にて妻を叱つた息使ひ　同
こんなもの五万円よと成り上り　同
新婚の当座アノウと呼んでゐた　同
キヤツチボールの様に贈答くりかへし　同
柔道を習うて婦警また太り　貝塚市　津田　干舟
展望車ゆふべに変る雪景色　同
呼鈴のあるお隣で親めず　同
雪だるま除けて主治医の車つき　同
ダンサーの帰る頃から牡丹雪　今治市　長野　文庫
罪なしと言へず被害者慾がすぎ　同
品物に人間添へた御婚礼　同
二階まで靴持ち上る世と変り　同
遺失物係笑はす握り飯　同
糸へんの景氣二号も出來たとき　大阪市　三木　秀雄
父親は障子をやぶる子をおだて　同
子の育ち合成樹脂の食器ふえ　同
親も又かく育てしかやゝつかれ　同
もう帰へれの信号らしい餅を燒き　出雲市　野村　岬月
理もあろがサノヨイくで飲みなはれ　同
ツンとしてだまされませんさいつてゐる　同
鍵かけたら他家で泊つて仕舞つたの　同
沒法子ではおさまらぬ噂さきき　廣島縣　高島　玉兎
座談会女房天晴れ嘘を吐き　同
御他聞に漏れず内助はブロンデイ　同
日の丸のはためく風を子はせがむ　同
恥かしいふりもするなり賣春婦　大牟田　新谷　風浪
判決へ母の手紙が加味される　同
綺麗な目マスク取らして見たくなり　同
ライターを持つ人が減り講和近し　同
鉛筆が折れて子は書く字を忘れ　愛媛縣　田村　孤峯
花に臥し慰められる事はいや　同
傳説を聞けば普通の松でなし　同
春の風まだ病院え子を負うて　同
風流な趣味を社長がけなすなり　大阪府　上島きはち
金のない夜は布團をかぶつて寢　同
共稼ぎ炊事がうまい亭主なり　同
糸篇のビルにすらりと自家用車　同
初島田炬燵にオデコ休ませて　東京都　松井　蛙声

リレー隨筆 3

生意氣ざかり

仙台　濱　夢助

話は大分古く、殆んど三昔前後にもならうといふ微臭い話である。

辺土にあつて語るに友も尠く聞くに先生もなかつたので、好きな川柳や俳句は中央の雜誌や新聞への投書へ頼る外なかつた時で、從つて私の投書家デモ連の烈しい熱が火花した。死んだ谷孫六先生が、まだ東京毎夕にゐて矢野錦浪と言つてゐた頃、私も盛んに投書して初めて入賞した時だつた。いゝら待つてゐても賞金が贈られて來ない。とうとう痺を切らして選者宛に当然の權利として賞金の請求をやつた。

処が錦浪先生の返事に「あなたの字が余りお上手なので（下手の暗示）住所の判読に苦しんだため遅れた」云々とあつた。然るにその矢野先生の文字と來たら驚くほどの下手くそで、どう比べて見ても自惚ればかりでなく私の字の方が良いのだつた。その後講演のため仙台に來られた時、この話を先生と語り合つて大笑ひした事があつたがそれから親しく御交際を願つて先生主催の綜合文藝誌「白羽」の会員にもなり大に頑張つたりした。

その「白羽」でも都々逸に先生が軸吟につけた……一寸忘れた箇所があるが「枕刀

歳末の街やけくそな拡声器　同
家計簿の赤字へボーナスまだ来ない　同
羽根ついた僕は筒袖君おさげ　同
夜遊びをする子の床を温める　岡山縣　水田　草骨
合槌が謠曲を聞くはめになり　同
鶴亀の軸でかくした壁の穴　同
元日の松竹梅へ誰も來ず　同

三才の子の父となる（二句）

日曜日子と起き子と寝子と遊び　鳥取市　森本法泉子
小兒科があるとはうかつな親なりき　同
繁昌の人かさ〳〵と飯を食い　同

市議收賄

妾宅で包開いたからのこと　同
帶の巾あゝバランスのとれた巾　和歌山　秋月　宏方
またもとの草に返した休閑地　同
スリッパにされて軍靴も酷使され　同
教壇へキッスしたような顏でなし　同
スバル座を出てアベックに宵明り　大阪市　木村　草々
男とは馬鹿馬鹿馬鹿とジャズバンド　同
ネット裏職にあぶれた身ををろし　同
電柱のビラは家出をした妻か　同
何物に抵抗を感じての決心ぞ　岡山縣　小林　鳴子
マ、の日記甘い思い出も書いてあり　同
轉宅の書餉揃はぬ箸で食べ　同
人一人抜くのに必死と挑んでる　同
ね返りをうてば背中にあつた冬　愛媛縣　村上　旭童
言うて見るだけの不平を農夫もち　同
俺一人怒つただけのつまらなさ　同
温情のマフラー駅へ駈けつける　倉敷市　木村千代男
あの旦那踊る神様信者なり　同
花束を贈る娘親も競り合うて　同

長男入学妻夜学

一家中ABCを習ひ出し　布哇　滝　純香
神様にお願ひしたいことばかり　同
夕焼に涙流して居たりけり　同
又こゝに針が落ちてる拭掃除　尼崎市　靜岡ちか子
拭掃除ここらに棚が欲しいなり　同
市民税夫もあきれ腹を立て　同
煙突ののつそりとしてスト続き　荒尾市　蒲原　元祿
弁当箱洗つて帰れば氣にくわず　同
注連縄へ下れば紙もあら尊　同
藪入りの孫うちの孫入り乱れ　和歌山　浅川　桑南
もう落さぬぞ皮の手袋　同
飲めぬ日が和尚に続く農繁期　同
お友達ですと共学わるびれず　愛媛縣　米沢　曉明
親しさはマッチを投げてはばかちゃ　同
自治会で決めたと足袋をはかない子　同
良心が有りアドルムをふと思い　岡山縣　浜野　奇童
病床で両手合はせた初日の出　同
ミスポリス私服になってスリに会い　同
未亡人にて候や子が一人　大阪市　横田　方眠
無抵抗小使と云ふ仕事で居　同
妻も亡し子も亡し酒の味を知り　同

愛妹死して早一年（一句）

妹の日記余白のまゝとなり　京都市　若狭　狂風
生きて行く舞台が冷えるストリップ　同
先輩の泥を落すも業のうち　同
バックミラー何とみすぼらしげな俺　貝塚市　上坂　朱人
娘が何と言ほうと母の天理教　同
看護婦のあくび重患ないそうな　同
年明けて早や人の訃に接したり　貝塚市　河楊　梵鐘
帰省して藁沓なんかもう穿かず　同
赤屋根の丘で作家はバスを降り　同
復興へ地下の住人忘れられ　足利市　宮崎　可郎

を重石において風……の蚊帳」といふのへ「それは先生駄目だ。明治卅九年版文藝倶樂部の臨時增刊「風流陣」俳句大懸賞で二等か三等になつた「風の蚊帳枕刀を重石かな」の引伸ばしにすぎない」と鉛を突込んだりした。そういふ私は生意氣盛りの投書時代をすごして來た。講談社華やかな頃、講談倶樂部、面白倶樂部、現代、を初め外に文藝倶樂部、日の出、等々片ッ端から投書に熱を上げ而も、一雜誌に五種類から多いのは十種類に及ぶ單文藝を毎日欠かさず投書してゐたので、「デモ連」の迷称を口の悪い友人からさづけられた程だ。

これもその時分の話で今以て氣にかけてゐる事だが、講談社の現代だつたか何か忘れてしまつたが、当時大懸賞ばやりの時、一句五錢かの入花料で一等二百円といふのだから今の金にすると優に四五万円にも相当する賞金と思ふが、所謂全國のデモ連が大に鎬を削つたものである。その時「世話」といふ題の川柳で一等になつたのがいまは故人になつた北海道の尾山夜半杖君で「世話しても恩に着ぬほど深くなり」といふ句であつた。選者は○○先生（現存されてゐるので敬意を表しておく）であつたが、私は選者当てにこの句に対して一種の抗議めいた手紙を出した。それは「世話せられても恩に着ぬ」云々は浮瑠璃「近頃河原達引」お俊傳兵エのサワリの中にあつて軟文学での名文句と言はれてゐる「世話せられても」を「世話しても」とし下五に深く成と

にきびとり美顏水
横谷順天堂

公休日朝寢に惜しい空の色　兵庫縣　赤木　紅山
さあ貰ふとなると猫でも顏の事　同　中谷葉菜子
壁は涙をふいてくれないまに立ち　大阪市　大森　苑女
朝寢して貧乏も苦にならぬらし　岡山縣　野口卯之助
門松の横で浮浪兒ふるへてい　宮崎市　永井　碧陽
姉妹のよさを五十の歳で知り　岡山縣　森山　壯
佛壇へはたきをかけて年の暮　出雲市　佐藤　独実
醉虎傳思ふ存分あばれたし　同　石川縣　山田　陽々
醉虎傳下駄と下駄とで渡り合ひ　同　熊本縣　西野斗四翁
雪を踏み踏んで新聞記者が訪ひ　同　出雲市　原　峯雲
金のある世界をいまだ夢に見ず　同　廣島縣　杉原　愛鳩
不潔なくち掌でうけとめる　同　高知縣　山本十四郎
春や春猫の眼玉のまん丸く　同　愛知縣　津川　竹坊
案山子立つ所まで食つて行くスズメ　同　岡山縣　田村　藤波
助けられ今は助ける赤い羽根　同　米子市　石谷　風塵
驚きは子供が月給持つて來る　同　米子市　小西　雄々
雨に曇る顏顏顏の安定所　同　東京都　梶本　梅香
うろたえた一家心中毒づかれ
シャボン玉あれにようにたあんたです
妻の留守味噌だ砂糖だ火が消えた
呼べばすぐ答へる樣な寒の月
同じもの賣り出してからの不仲
奥樣の自慢で菓子も茶も手製
この馬鹿のお供で飲める一級酒
湯棺たのむこのあばら骨どうしよう
出の前は地声を出して女形
のし餅一枚お正月ござんなれ
なるようになれときめてる年の暮
一家四人梨を四つに割る平和
障子穴だん〳〵高く兒は育つ
苦も樂も忘れ小鳥と世に生る
新記錄積んで捕鯨船帰る
欠伸出る程花束を抱いて待ち
カルタ取り恋人が來て敗けはじめ

運勢に甘えて白髪ふえたのみ　長野縣　高峰　柳兒
成績簿子の行末を思いすぎ　愛媛縣　村上　鍛明
細々と失業手当でこもる冬　同　竹原　雲平
風邪ひいたぐらいでもうけ見逃せず　出雲市　同
冷飯の一粒毎に冬ひそむ　岡山縣　大塚美能留
本年のホープ兒と写される　同　田中　敬貢
よいざめの水に起きれば寒月の　岡山縣　長田　塗杖
ネクタイを結ぶこの手に鍬も持ち　大阪市　久家代仕男
甘党の前でガサコソ煙草出し　出雲市　同
雪道もいとわぬ友の有難味　同　岡田　夜潮
押賣へ時にはきついとこも見せ　岡山縣　山本　葉光
肩書へお世辞お世辞で日がくれる　大阪市　岡本　昇月
幸福の頂点乱れぬ寢息して　熊本縣　藤岡　鱒三
いゝ月をほめて盲目にすまなんだ　米子市　石川　侃流
雪つぶてストの宣言的にされ　下関市　大塚五厘棒
臍の緒を入れた抽出堅過ぎる　鳴門市　小倉へとち
蒲團着て初日を拜む七度二分　出雲市　同
管まいて驚かそうかと女言う　岡山縣　片山　巷雨
道徳のない感情が鋭すぎ　同　東京都　石居　高志
寒梅の樣な匂ひを処女は祕め　同　同
肩書を脱いだ恩師と醉いつぶれ　大阪府　北山十字路
女房ははつきりお米がありません
胃が痛いのに心配事かと問はれ
綻位という針のじれつたさ
宝くじ買う話へ妻のつて來ず
三ヶ日三つの時計みなとまり
停年へ間近に迫る松飾り
投げ賣りと云ふ手を持たぬお百姓
銀狐兎の襟の兒を連れて
元旦の計も易者に訊いてみる
春風に博覽会のアドバルン
子が出來てみつともないと手を組まず
宿命かネツカチーフがよく似合ひ
いえそんな氣では毛頭ないるり羽

する位の事は川柳を二三年もやつたら誰でも出來ることである。此れについて御教示を乞ふといふ内容の手紙たつたが、選者からは返事がない。折返しもう一遍、同じ文句の手紙を出したが梨の礫のそれつきりになつたのであつた。講談社氣付で選者宛に出した手紙故、或は二度共講談者で握りつぶして仕舞つて選者に届かなかつたのか？…何れにしても今以て氣掛りな事である。

そうした生意氣ざかりに花が咲いて、講談社から出てゐた投書家番附（年二回発表）で東の大関になり、西の大関が大阪の「西村花紅」といふ人であつた。どんな人かと思つて商用で大阪に行つた折、道修町にその居を訪れたら、藥屋の若旦那で二十五六の私が若いと思つて行つたらなんと十八歳といふ若さには驚いた。既に「紺のれん社」といふ四十四五人もの社を作つてリードされてゐて、初対面の私を囲んで歓待して頂いた感激は未だに忘れられない。

漫譜を昨年終へた私に、当時の相見ぬ投書上での知已もまだ残つてはゐるが、生意氣盛りが恋しく、私にその生意氣盛りがもう來てくれないのが淋しくも思はれる。

次は三橋鳳龍洞氏（二六・一・一〇）

筆者は柳誌「宮城野」主宰

古川柳の一面

不死鳥

今から見ると全く判じ物のような古句がある。

松前を近江に着せて春を待ち

これは近江の源五郎鮒の昆布巻をこしらえて、春を待つたと云う句であるが、松前が昆布を意味し、近江が鮒を意味することを知られば、サツパリ何んのことか判らない訳である。

誰かゝらボタンが落ちた更衣室　同　岡山縣
税務署へ隠した牛が鳴きよつた　片山　百郎
役得の再選されてホットする　同
美人画のカレンダーを見て日を暮り　大阪市　西川　惠風
呑み助のにやり笑つた値下記事　大阪市　山本　信陽
あほらしいあほになりきれない怒り　大阪市　清青扇子仙
共学へ母悪いとこばかり云ひ　高知市　松下一徹郎
昇給の変りに子供又一人　廣島縣　山田　且三
時計まく逢ふ可き時刻がまだるこく　横浜　石丸　保美
週末の旅女房の席まだあかず　廣島縣　山田スミ子
僕だつてけちにもなるよ子の寢顔　萩市　多田　穂波
浮かぬ日は街頭宣傳氣にさわり　岡山市　井野　格一
「あンら目出度や」で万才ことわられ　大阪市　岩田　柳亭
腕白の順に竹馬高くなり　米子市　小西　豪夫
腹立ちの声の尖つた舌の先　熊本縣　鹿本　実信
人だかりのぞいて見ればたゝ賣り　堺市　三宅　露草
霧の街アブレゲールの女靴　光市　加川　大然
見せつける氣の二人で見舞に來　豊中市　井上　直郎
マッチ一本火の要心の子が街へ消え　大阪市　永田六竜子
代用食父のおならに子のおなら　兵庫縣　照屋ひろし
勘定をまた拂はされた奇遇なり　岡山市　大倉　四案
ノーハットちとはずかしいハゲがあり　岡山市　坂井　三葉
お体に障ると女房二匂はね　岡山縣　難波　鴻峰
一年の計をニュースが迷はせる　芦屋市　後藤　志津
之とても馬鹿と言われた賜ぞ　出雲市　石橋　薺兆
スリも読む懐中物に御用心　大阪市　貝塚谷恒良
元旦よ日の丸なくてさびしいぞ　出雲市　石川日出夫
ぜい肉の男をダンサーもてあまし　和歌山　田和みのる
終バスで帰る女房に養はれ　貝塚市　中尾　彬光
隣の娘噂も立てず二十七　貝塚市　重田　駄柳
宣傳の特賞ついに残るなり　防府市　重田　峰秀
宝塚乙女の夢の灯がともり　貝塚市　多炭　若柳
宝くじ当らずいつそ死んだろか　岡山縣　河島　露外
このまゝでいるとは女ひたむきな　貝塚市　芝　無骨

松前源五郎寒中御見舞と云う古句もあるが、松前源五郎を人名とでも思つたら、これ又サッパリ判らない句だ。前句の解からこの句も松前は昆布であり、源五郎は近江鮒であるとしたら、何んでもなく判る。

昔は年越には必ず鮒の昆布巻を喰べたのだそうだ。

女形

課題吟

水谷　鮎　選

内股に歩く姿も女形　古洞子
女形乳房の丸味が物足らず　実信
洋服で出勤してる女形　太路
姉妹の中で育つて女形　千舟
おでん屋で女形の素顔見て戻り　翠柳
村の娘を湧かせて女形そつと発ち　芳泉
耳のわきかき〳〵出てきた女形　峰秀
女形弟子には地声で用を云ひ　美能留
花道の女形にあつたのゞ佛　不味
女形希望くずされまいとする　孤峰
姫御前の樂屋に茶碗酒もあり　如川
女形なんてグロテスクだわと二十の娘　茶々
女形から女形へせりふ杉木立　志津雄
女形いぢらしい恋してる也　三葉
民主日本まだ女形の生きる道　七面山
女形のいつもの癖に拍手する　哲夫
女形女房の三味に生きてくる　千代男
塵布團も燃える緋色の女形　忠美
変態と云はず女形も糧なれば　樂天
女房の仕草を女形見逃さず　元祿
隅つこえ席を取つてる女形　敬貢
女形武勇傳から見直され　光郎
名女形家に傳わる芸に生き　齊花
セルの袴つけて女形の立稽古　貴久堂
手を冷やす心遣ひの名女形　志津
恋愛論女形も負けてゐず　哲水
女形絹代のような妻があり　同
女形カメラと夫が趣味と云ふ　扇子仙
花束へ舞台姿の女形　日潤子
小走りに暮れる街行く女形　柳堂
女ふと女形の所作に教へられ　鉄兒
立女形握手をさせてワンダフル　へとち
名女形素顔で見てもしながあり　愛鳩
女形足袋のこはぜに恥らひぬ　草骨
芸道に奉も忘れた女形　五醉
学校を出てから女形よく儲け　卯門
二丁待つ女形樂屋の篝炬燵　夢路
女形十九本の紐がいり　梅香
風邪ひきの女形に薄く髭が伸び　卯之助
女形名優の腋の下を抱き　孫猫
女形づらを外せば初老すぎ　謙三
髀を打つ手つきもやさしい女形　醉月
二代目も女形で通す身持え　夕鐘
女形意外に酒がいけるなり　美秋
廓町女形にしてはよごれてゐ　十四郎
女形女優に教へる型があり　葉光
國寶が女形の姿を信じかね　十九平
十三夜女形幕しのふと淋し　月仙
女形まだ見ぬ母の役で受け　正一
客・女形にも男としての意地があり　青雨
客・女形樂屋に訪へば笑をすえ　十字路
客・恋の現色なまめかしき女形住む　斗四翁
客・数命傷女形このごろ肥りだし　十九平
客・人情の一筋に生く女形　山雨楼
人・わいがかいなと雁玉の迷女形　不二
地・旅愁ふと二枚目と違ふ女形　浪二
天・鏡台へ女形の姿入り切れず　潤・年
軸・竹の画が好き女形師を偲び　鮎美

將軍娘（三）

山路閑古

（三）

父はもと幕政にもたづさはつてゐた程の人物であるから、けつして沒常識漢ではなかつた。しかし、例の慶喜邸新築の事件以來、世間もせばまり、生活も逼迫して、鬱勃の氣の遣り場なきまゝに、次第に偏狂の度も加はり、奇行の數も增して行つたやうである。

先づその服裝が異樣であつた。夏も冬も粗い縞の羅紗の洋服の一張羅で、頭には桐油の韮山笠をかぶり、脚には編上げのゲートルを着け、さうして更に珍なのは、朱の打紐を以て、肩から斜に、眞鍮喇叭を吊つてゐることであつた。

前にも述べたやうに、父は幕府の陸軍奉行を勤めてゐたことがあり、その當時父は幕兵の操典を定め、これに喇叭を採用した。後に喇叭と兵隊とは切つても切れない不可分の關係を生じたことは、人の知る通りであるが、その基を開いたのは、實に父の創案に係るのである。この故に、喇叭は父にとつては又とない記念物で、人目には笑止でも、恰も家重代の陣太刀を背負つて歩くやうな氣持で、常時これを携へてゐたものらしい。唯厄介なのは、往來で所構はず吹き立てることで、瀨木は狂したと風評を立てられたのも万更ではなかつたのである。余談ではあるが、次のやうなことも傳はつてゐる。

それは、秋の月のよい晩であつた。隣家の慶喜邸には、東京から觀世大夫が二三の弟子を連れて、見舞かたゞ〳〵伺候することがあつた。當時は能樂もいたく衰微してゐた頃で、觀世大夫も尾羽打ち枯らしてゐた。互ひに失意の境涯を慰めるべく、主客隔てを置かず、素謠一番を諷ふのだつたが、その謠には、行平中納言の須磨配流を物語る「松風」と題する一曲が選ばれたのも、折柄、場所柄、ふさはしく思はれた。

シテは慶喜で、ワキをば觀世大夫が諷つた。ワキの「語り」の「これなる海士の塩屋に立ち寄り、一夜を明かさばやと思ひ候」の一句も、この場の訪客の氣分によく調和した。

月は皎々と冴え渡り、緣先は晝のやうに明るかつた。慶喜はやをら扇子をとつてそれを構へ、息を調へて、大夫の「語り」の終るのを待つた。シテの謠は「汐汲車わづかなる、浮世に廻るはかなさよ」といふ、「眞の一声」のところから諷ひ上げるのであるが、この句も庵主の感慨にふれたよい文句であつた。この時、この場で、この人の咽喉から押し出されて來る謠は、その謠の高下に拘らず、一世一度の聞きものであるから、一座は息もつまるばかりに緊張して、シテの諷ひ出すのを待つてゐた。

「汐汲車、わづかなる」

澁いが、いゝ声であつた。

「入り廻し」の節もたつぷりとして、かつて一天四海に兵馬の權を振舞つた人の声かと、そゞろに肌寒きまでに傾聽させられた。

その時である。突如として塀の外から、恰もこれに和するかのやうに、喇叭の音が聞えて來た。

トテチテチテチ　テチタ　トトトテチ　テチテトテチト

愚にもつかぬ行軍喇叭である。

「浮世に廻る、はかなさよ」

トテチテチテチ　テチタ　トトトテチ　テチテトテチト——

「これでは敵はぬ、よさう」

と云つて、慶喜は扇子をころりと捨てた。

一座は顏を見合はせ、しばし喇叭の音の鎭まるのを待たうとしたが、彼方もやはり月に浮かれて吹く喇叭と見えて、いよ〳〵吹き募るばかりであつた。

「何といふ不作法千万な。御前もわきまへで……」

と、觀世大夫は思はず眉をひそめたが、又急に笑ひ出して、

「音に聞く瀨木權大夫の喇叭といふは、あれでござりますな。はてさて、狂つたわい」

と呟いたと云はれる。

この程度の喇叭の被害は、近所合壁一樣に傳はる訳で、父は必ずしも慶喜に含むところがあつたのではない。月に浮かれて一曲奏でたまでのことであらう。

流人の境涯と云つても、前將軍の成れの果であるから、慶喜の日常生活は相當に豪奢であつた。どういふ收入があつたとも知れぬが、所得稅から見れば、當時靜岡の素封家の双璧と云はれた、野崎彦左衞門、小林年保両人の所得稅を併せた額を遙かに凌駕して居つたと云はれる。常に二三台の無蓋の二頭馬車を駈り、多くの公達や姫君を分乘せしめて、欠能山や三保、興津あたりの海岸を逍遙することが屢々であつた。それらの無蓋馬車の中には、例のせつ子姫や弟君なども乘つてゐたことは、想像するまでもない——

私はつく〳〵人間の運不運を思つた。同じく人の子として生まれ、昔のことはともあれ、今のこの互ひに落ぶれた境遇にあつても、運命の隔りは尙依然として天地霄壤のごとくではないか。馬車に乘ることなどは、私には夢にも望まれないことであつた。

然るに父は、私を馬車に乘せて、海水浴に連れて行くと

云ひ出した。大体が子煩悩の人で、殊に晩年に出來た、たつた一粒種子の男の子であるから、父は随分私を可愛がつて呉れた。馬車に乗せて、海水浴に連れて行つて呉れようといふのも、万更出まかせの氣休めではなかつた。

海水浴は静岡から三里ばかり離れた、江尻、袖師の海岸で行はれた。駅から汽車で行く便もあつたが、傳馬町や水落町にはそれ〳〵乗合馬車の立て場があつて、東海道や北街道を馬車で出掛ける人もなか〳〵多く、つまり馬車とは、その乗合馬車を云ふのである。

その日になると、父の例のゲートルをはき、きびしく足拵へなどしながら、馬車はもう門の外に廻してあるぞと云つた。そのことがすでに奇人めいた、怪しい云ひ草であつたが、果せるかな、父は私を失望させた。

馬車は乗合馬車ではなかつた。勿論二頭馬車でもなく、何と炭屋の大八車であつた。

父はこの見すぼらしい荷車に私を乗せて、而も自分で挽いて行く積りなのである。

荷車の上には、青竹を曲げてその上から布を覆ひ、いささか日除らしいものが仕掛けてあつたが、蒲團もなければ蓆もない。西瓜や南瓜ではあるまいし、どうしてそのやうな車に乗れよう。私は弁当を持つたまゝ、暫らく茫然と佇んでゐた。

父は大変に腹を立てゝ、

「さては乗らぬ氣だの。こら欣三、よつく聞けよ」

と前置きして、メリカリのついた小言を捲き出して來た。

「御前も今に出世して、二頭馬車に乗る氣であらう。いやさ、御前ばかりではない。誰でも男はさう思つてゐる。さうしてその志さへあれば、馬車なんぞに乗るのは造作もないことだ。こちの草履取の笠野宗一郎でさへ、セメントで身を起して、今は二頭馬車で歩いてをる。ひやつこいひやつこいと云つて、水を賣つてゐたあの男を忘れもせぬ。だが、父親の挽く車に乗るとは、車力、人力車夫の子はいざ知らず、人間誰にもある仕合ではないぞ。こちの挽くは法の車、挽かれる御前は値遇の縁、唯ありがたいとこそ思ひなされ。これ、欣三、判つたか。」

「判りました。」

「ならば乗るか。」

「はい。」

「乗れい。」

「はい。」

私は半ばべそを掻いて荷車に乗り、人目に掛らぬやう、逸早く日除の奥に身をひそめた。よた〳〵と挽かれて行くと、往來の人は立ち止つて、無遠慮に日除の中を覗き込む。子供が一人恥づかしそうにすくんでゐたとて、さのみ人の好奇心を唆る程のことではなかつたが、それが身も世もあらず恥づかしく感じられたのは、年よりはませて早く春を知り、誰故とも知らず、仄かな恋をさへ抱いてゐたからであらう——。

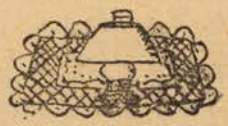
忽ち前面に、轟轟たる馬車の音が聞えた。数台の馬車が疾風の如く馳せて來た。父はよろめき乍ら、荷車を道に片寄せ、又喇叭をとつて急に吹き立てた。

トトテテチタチテトト　チトチチテトト　タタターテトトトテテチタチテトト　チトチチテトト　タタターテトト

「友軍來る」の曲である。すれ違ふ公達、姫君の馬車からは、わつと歓声がわいた。私は日除の蔭にいよ〳〵小さくなつて蹲まつてゐた。馬車は一台又一台過ぎて行つた。

最後の一台には、面長の、高貴の容貌をした人が乗つてゐた。父は笠を脱いで恭々しく敬礼した。その高貴の人の傍に、私は見覚えある一人の少女の姿を見つけたので、思はず眞赤になつて荷車の上に俯いてしまつた。

せつ子姫、せつ子姫、夢寝にも忘れないせつ子姫。例の険のある少女の眼は、私を見たか見ないか、その馬車も亦風の如く馳せ去つた。（未完）



不朽洞の

喫煙室

云いたい事を云へばジーベう

（順着到）

先生御免

須崎　豆秋

マメアキさんと呼ばれても別に何ともありませんが、先生、先生と云はれると実はギョッとするんです。いやなんです。どうか豆秋君とか豆秋さんと云つて下さいたのみます。

「豆秋君」が一番ピッタリしていますネ。

うれしいのは鮎美さんがトラになつて、コラ豆秋、ヤイ豆秋と呼びかけてくれる愛情です。

一人二役

水谷　鮎美

ジェーン台風でたつた一つの靴をだめにしてしまつた私は、それ以来白足袋に下駄履きの背廣で通勤してゐます。社の机で老眼鏡をかけますと、トルーマン氏に似てゐると云ふのです。余り云はれるので鏡の前に立つて見た成程似てゐます。街を歩くと、ワンマンだと云はれるし、到頭トルーマン氏とワンマン氏にされてしまひました。

ほんとの両氏にほんとうの生命ある川柳を知らしめたいものです。

電報

水谷　鮎美

フキウトウカイインノベージノキカクオオイニウレシカクイノゴヒツエンオイノル　アユミ

バトン

福田山雨楼

自分は路郎先生の傳記を畢生の事業にしたいと、予てから心に期しているのであるが、病弱の身とても先生以上に長生きができそうにない。と云つて、先生御健在中から筆を起すことは意に副わない。それに大阪を離れてから十六、七年、その後の消息にも疎い。で、誰か若い特志家に自分の素志を継いで貰いたいと思う。

自分が瞑目したら、若干の手記、資料を残しておくつもりであるからバトンを受取つて貰いたい。

耳鼻咽喉科

牟田病院

院長　牟田哲三郎（一哲）

大阪市南区長堀橋交叉点西・電話船場五（〇）番

いのちある句を創れ

花地の塔

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

新春句会（本社）

一月六日　午後五時三十分
於　大　宝　文　化　会　館

一九五一年初春句会、今月は企劃部の努力と苦心になる多彩な催しに、開場と同時にぞく〳〵と集る柳人に会場立錐の余地ない盛会。先ず講演に路郎先生起ちて句の生命について熱弁を揮はれ、測場拍手の中に柳人の反省をうながされた。続いて漫画劇、酔虎座談会、文藝万才と六々披露され、その熱演振りに拍手又拍手、時間一ぱいプログラムを運ぶ、最後に川柳東西大相撲に得点のシーソゲームにはら〳〵させ、東軍の勝利に帰す。兼題披講合点発表の結果、本月の不朽洞賞は武部香林氏の手に落ちた。

昭和二十五年度句会敢闘賞として鮎美愛論、正司三氏が表彰の栄に浴された。各賞品授與の後九時盛会裡に散会。

（文蝶）

出席者＝路郎・撲子・きさ子・翠光・小太郎・文蝶・豆秋・春斉・喜久堂・哲水・扇子仙・瓜平・栞・青丹子・鮎美・沐天・香林・吸露・眉水・三司・落帚・春柳・古方・春草・旅風・種美・没食子・愛論・よしつぐ・生々庵・澄風・芳人・紫香・恒明・風路・淡舟・白柳子・角嵐・飛芳・竹荘・晴峯・秀雄・六竜子・博也・鬪骨・亜鈍・貞女・夢裡・十字路・万樂・妄夢・史葉・醉歩・梨里・葭乃

兼題「三ケ日」　廉生　路郎選

フィアンセが入りびたつてる三ケ日　春集
三ケ日手当がつくので働いたねむるだけねかせてをけと三ケ日　よしつぐ
三ケ日虚礼とやらにくたびれる　妄夢
注ぎこぼす酒もほの〳〵三ケ日　翠光
三ケ日じつと座つてくたびれた　同
縫紋で座つたまゝの三ケ日　香林
三ケ日燭番をしただけの事　古方
三ケ日女房は損な生れ付　葭乃
のうのうとたじのう〳〵三ケ日　鉄兒
病人も坐つて食べる三ケ日　扇子仙
黒檀の埃が目立つ三ケ日　春集
三ケ日丸公で酔ふ医者稼業　きさ子
呑んで寝て起きて呑む三ケ日　生々庵
三ケ日の日記まとめて書かれたり　芳人
酔醒の水に悔なし三ケ日　博也
内股で歩いてみるも三ケ日　夢裡
ブラットで泥ンこになる三ケ日　貞女
三ケ日だけはつけてた日記帳　亜鈍
三ケ日すぎて静かな衣紋掛　青丹子
焼酎が寝かしてくれた三ケ日　角嵐
三ケ日よその壁で寝てさめる　亜鈍
三ケ日お神籤ばかり引いて来た　博也
三ケ日我れ老いたりと矢張りのみ　路郎
入歯とは悲しかりけり三ケ日　同

兼題「梯子酒」　市場没食子選

梯子酒家ではヒスが待ち構え　春集
梯子酒時計も飲んで帰つて来　水泡
梯子酒オーバの泥へかしこまり　妄夢
おもしろい事でもめてる梯子酒　鮎美
梯子酒一つ覚への唄があり　万樂
焼酎にとゞめさゝれた梯子酒　旅風
梯子酒リンタク賃切る仕儀となり　同
梯子酒僕のざんげの過半数　扇子仙
梯子酒それから先が覚えてず　紫香
土産だけしつかり持つた梯子酒　風路
色氣など卒業してる梯子酒　栞光
酔ふほどに飲むほどに梯子酒　春柳
ホール組を尻目に一人梯子酒　瓜平
ボーナスの不平が揃ふ梯子酒　万樂
特級酒一級酒終いは酎の梯子酒　晴峯
梯子酒線路づたいに帰る途　きさ子
では君につきあふ梯子酒となり　日潤子
梯子酒こゝは俺が出しとくよ　哲水
梯子酒それでも無事に帰つて来　春草
終電に乗れぬときめた梯子酒　生々庵
僕は〳〵ともう君のない梯子酒　三司
梯子酒だん〳〵家へ近くなり　白柳子
梯子酒側で女が飲んで居る　いわを
梯子酒ケイラを脇に従へる　亜鈍
友達と別れてからの梯子酒　文蝶
叱られて嬉しがつてる梯子酒　竹荘
梯子酒月三更の道をゆき　種美
梯子酒元の飲屋へ戻つて来　落帚
燭をした徳利へ眠る梯子酒　亜鈍
梯子酒大きな声では入つて来　豆秋
梯子酒妻を無視して行くと云ふ　澄風
梯子酒まだ新店を飲み幾し　香林
評判の梯子酒なり恩師なり　没食子

兼題「ポチ袋」　上田　翠光選

おしるしにしてはぢんだポチ袋　没食子
三助の耳に挟んだポチ袋　瓜平
双六を買ふポチ袋一つ開け　きさ子
水臭いわとポチ袋睨まれる　亜鈍
百円を少さくたゝむポチ袋　三司
ポチ袋きれいな嘘をきかされる　妄夢
追羽根の袂を落ちたポチ袋　春斉
ポチ袋それから車すぐに来る　水泡
ポチ袋羽子持ち替えて嬉しそう　香林
ポチ袋ほんのしるしと云ふ重み　恒明
ポチ袋二三殘つた小正月　文蝶
糸へんの景氣を見せたポチ袋　恒明
ポチ袋代も幹事はとつておき　古方
無理云ふたわりには軽いポチ袋　生々庵
耳打に曰くあり氣なポチ袋　十九平
追いつける速さで逃げたポチ袋　落帚
前掛で拭き〳〵受けるポチ袋　同
門松をさかさにされたポチ袋　香林
兄弟へ中味の違ふポチ袋　日潤子
ポチ袋子沢山へは寄りつかず　眉水
ポチ袋足らず年始の子を待たせ　日潤子
ポチ袋やつぱりけちな生れ付　鉄兒
帯解いてけふの稼ぎのポチ袋　角嵐
ポチ袋させた御礼を言はれたり　栞
ポチ袋三軒廻る嵩を入れ　きさ子
ポチ袋皆母さんにあづかられ　日潤子
子の数を数へ直したポチ袋　万樂
喜びの幕朝からのポチ袋　没食子
ポチ袋案外軽いおじぎする　翠光
ポチ袋こんな子持と知らなんだ　同

山焼川柳大會（奈良縣）

一月十五日　於奈良公会堂
兼題「山　焼」　廉生　路郎選

消防手今日のつけ火へ有卦に入り　無六
燃え熾る三笠へ老婆掌を合わし　文女
山焼きのふもとの茶屋に三味が鳴る　兎子
燃え盛り山焼一寸こわくなり　蛮天坊
山焼へ消防自動車待機する　文蝶
山焼へ御無沙汰兼ねて招かれる　一歩
山焼へ子鹿ちつともあわてない　七面山
山焼に右翼團体めいて立ち　白柳子
山焼の古い歴史をもつけむり　豆秋
山焼へ一日のばす奈良の客　翠光
燃え殘る山焼の火で煙草つけ　没食子
山焼にみかんの皮も共に焼け　文蝶
山焼に不動明王出そう也　白柳子
山焼を身重の妻と見ず帰り　春集
山焼のそれから覆む奈良七重　仙居

阪田謄写版

大阪市北区芝田町五二
株式会社 阪田商会
電話 五六三一 福島一五九九番
電話 五六三一 福島一五九九番

おりからの風に山焼きちと困り　方眠
山焼に虫の命をふと思ひ　十九平
山焼にかゝわりのなし鹿の群　夢裡
山焼のそれから古都の春となり　梨竹荘
山焼を見るをプランのうちに入れ　千代男
山焼は三笠があってこそのこと　藤代
山焼と競ふ花火の輪がもつれ　花王
山焼へ丁度今ごす窓を開け　正貴
山焼を神火とも見る子の日記　旅風
山焼けて虫には寒き夜とはなり　蘇堂
飲みごろの燗山焼の窓をあけ　路三
山焼も花火もすんで奈良静か　十起夫
山焼いて奈良は土産が賣れるなり　郁三
山燃えて鐘の余韻も歴史めく　醉歩
山焼の由來は宿で聞いて出る　季賛
山焼を新聞で知る土地に住み　千舟
山焼も見ずに電車で醉うて去に　日潤子
山焼の今日來賓として祝詳　凡々
五・アゴ紐がくつきり浮び山は焼け　小松園
五・山焼に火は美しいものと知り　豆秋
五・恍惚として山焼を見てるチボ　ひろし
五・山焼に生きぬく小さい芽の力　古方
五・山焼が始つたなと汽車の窓　不二
人・山焼へバケツリレーの頃思う　鉄兒
地・山焼へ一本提げたうるさがた　秋翠
天・山焼へ下駄履きのまゝ作家來る　秋翠

兼題「奈良の街」　本田渓花坊選

基盤目の名残り止めた奈良三條　四郎
人力車に母さん乗せて奈良の街　青丹子
作文のある一頁奈良の街　好美
奈良の街若草山から春の音　哲水
画心しきりそぞろ歩きの奈良の街　瓜平
ごの顔も旅人と見る奈良の街　春巣
奈良の街一刀彫の蔣と姥　つとむ
外人も判つてくれる奈良の街　ふじ彌
奈良の街彫師は脊を丸く抜け　同
一生の見鹿ばつかりの奈良の街　失名
屋根越しに若草山も春を待ち　水客
奈良の夜はもう暮れ果てた下駄の音　万滴
桃割で通つて見たい奈良の街　操子
製墨のでかい看板奈良によし　月南
水取りの粉雪ちら〳〵奈良の街　葉光
より添うて二人でぬれた奈良の街　佐和
奈良の街鐘を激へて昏れかゝる　敏夫
泊らない足並ばかり奈良の街　眞珠洞
寺寺の今朝は奈良を低う抜け　郁三
奈良の街祖母の手を引く春日和　路三
邪心なき旅のこころも奈良の街　死生
奈良らしい土塀を越えて花は咲き　凡々
五・奈良の街地図を拡げてこう歩き　愛論
五・物干しで塔の見られる奈良の街　薺花
五・鐘の音に旅情しづかな奈良の街　由布
五・疎開したままで動けぬ奈良の街　千舟
五・奈良の街絵筆を洗ひ暮れかゝり　秋翠
人・鹿のゐる街がうれしい宿の傘　水客
地・日の丸に落ちつく奈良のよい旗日　九葉
天・鐘きいて泊る氣になる奈良の街　芦穂

兼題「五重の塔」　藤本　蘭華選

團体旗五重の塔が招くなり　葉光
水取りの寒さ五重の塔が見え　九葉
ジープから五重の塔を撮る角度　郁三
昏れ残る塔へ宿着の電れと立ち　蘇堂
風鐸は五重の塔に鳴りもせず　眞珠洞
五重の塔入道雲を眞二つ　潤
もう一度塔を見上る発車ベル　醉歩
五重の塔観光バスを除行させ　逸人
名所図へ五重の塔をのぞかせる　敏夫
五重の塔ぐるり廻つて見上げられ　宙二
笈づるのつかれた影へ塔が伸び　草々
鹿も入れ五重の塔も入れて撮り　花王
一泊ときめて五重の塔で撮り　由布
跳ねた鯉五重の塔から見付けたり　貴山
塔の夢新婚の夢奈良の街　文女
五重の塔つら〳〵奈良はいゝところ　夢裡
五重の塔静かに奈良を眺めてる　好美
日本晴五重の塔もうれしい日古　古方
ぼたん雪五重の塔は重たそう　鮎美
五重の塔カメラにおさめこれでよし　志津女
先生の口もあいてる五重の塔　失名
五重の塔松の緑を抜いて見え　文蝶
町出外れた途端綺麗な五重の塔　青丹子
風船が逃げて五重の塔も春　水客
五重の塔一階住ひの阿彌陀さま　柏月
朝櫻塔がまぢかに見える宿　信二
孝行の今日は五重の塔へ運れ　日潤子
五・五重の塔科学のメスでくすぐられ　夏六
五・勤め無事五重の塔も昏れかゝる　正貴
五・山焼の煙に五重の塔はむせ　十起夫
五・上六で見た娘も來てる五重の塔　銀々
五・塔心に触れずに畫の僧学ぶ　鮎美
人・五重の塔鹿とうつれば奈良と云ふ　十起夫
地・五重の塔旅の障子を少し開け　水客
天・手拭を乾せば五重の塔が見え　薺花
軸・風の神五重の塔へ負けました　蘭華

兼題「注連縄」　椙元　紋太選

注連縄を今日のうれしさくゞりぬけ　由布
注連縄に祖父祖父らしい拔を見せ　七面山
式内とあり注連縄をいつも掛け　芦穂
注連かざり去年の釘へ掛けて無事　三司
注連縄がこの長屋にも似合うなり　成行
注連縄の橙が落ち小正月　文蝶
ストーブにくべて注連縄あつけなし　ふじ彌
何を建てるか空地へ注連縄を張り　愛論
注連縄が神代のことを偲ばする　十九平
注連縄で勿体つけた家に住み　同
大鳥居注連縄丈けが改まり　夢裡
廃業の今年も同じ〳〵飾り　万滴
注連縄の右と左をきいて張り　白柳子
天平が注連縄の奥に凍とあり　貞女
醉って出る顔注連縄のうつくしい　由布
注連張つた敷地小さく見えるなり　花王
しめなわがあるので歪あたたかい　たけし
さあ働けと注連縄は灰になり　考蕉
注連縄を替へてほこらも春の色　藤代
注連縄もいつち大きな酒の蔵　死生
注連縄をくぐる振袖すましてる　操子
注連縄はこれより内に這入るなと　初奈里
注連縄は心ばかりの侘住居　醉歩
注連縄があつて何んだか頭が下り　凡平
注連縄で何がいはれかありそうな　迷宮
格式があり注連縄を太く編み　夏六
注連縄をはづして賀狀まだ続き　不二
注連縄にこゝろ落ちつく大晦日　旅風
注連縄の湯屋の入口春らしく　天貧
注連縄の線へキツチリ屋台店　蘇堂
注連縄にほどよき風の祝詞聞く　郁三
雨宿りの家の注連縄いがんでた　勇銀
税金に追はれる家も注連を張り　九葉
神木と知る注連縄の眞新し　正貴
注連縄をくぐる頭に邪念なし　伸生
注連縄に何を祀るか木のうつろ　仙居
五・注連縄を月賦住宅派手に張り　月南
五・注連縄を張つて兎も角有難し　香林
五・注連縄の太さも古都に住みなれる　万滴
五・備かつている注連縄を見ておくれ　ひろし
人・これからの寒さを語り注連をたく　修三
地・加持新禱長屋のはとに注連を張り　白柳子
天・注連縄がすゝけたビルを春にする　十九平
軸・注連縄を序のような物置場　紋太

（以下次号発表）

川雑　南支部句會（大阪）

一月十二日　於阿倍乃王子神社

亀山　晴峯報

さようなら・復活・南・胸算用・
吹雪・野心
さようなら麦の青さが眼にしみる　扇子仙
そこまでが駅までになるさようなら　愛論

母袋未知庵著
川柳信濃國
信濃へあこがれを持つ人は多いが、ホントの信濃を知つてる人は尠ない。先づ本書によつて江戸文学から、信濃を探れ！ B6 二〇〇頁 二五〇円 〒二〇円
發行所　しなの川柳社
松本市大名町七一

さようなら次の彼女が待つてます　恒明
さようならヒントの端に書いて死に　紫香
「さいなら」とおんな夜霧にある技功　宣介
さようなら云えずアベックまだあるき　晴峯
左様ならの出来ぬ二人へ松がさび　没食子
さよならく〳〵と煙だけ殘り　淡舟
さよならと覆になつたを言いそびれ　文蝶
妻だけはさよなら云はず眼で別れ　梅里
儀だけたらまたお出でやすグッドバイ　豆秋
派手なサヨナラ旅客機で発つ　葉光
会者定離「蜜の光」すまんとす　古方
さよならをした母の手に育てられ　路郎
溜息が出てさようなら云えなんだ　同
復活の顔が歪んで戎餡　翔我
復活へ名士が二・三顔を貸し　妄夢
復活をしたが急行通過駅　文蝶
おめてたい軸復活を知らずゆれ　貴山
釜り替もすげかへもして復活し　梅里
復活へ紙風船に似た情　恒明
復活の工場の煙高く立ち　晴峯
愚痴となる話の中の南の灯　亞鈍
情熱のはげばみなみを歩くなり　宣介
誘惑に負けてみなみの隅に住み　淡舟
南から鼻緒の切れた下駄さげて　妄夢
南から財布を空にして戻り　翔我
南から生きてる便りあわてさせ　種美
又もとの南になつて三味が鳴り　沐天
橋筋や南が何だ綾るとしよう　豆秋
パチフクサ抱いて南地の妻を行く　扇子仙
役人に南で逢えば酔うてます　香林
胸算用落ちつく場所へ落ちついて　愛論
胸算用ねばならない人に逢ひ　香林
胸算が狂い八階迄昇り　種美
胸算用してゐる肩をつゝかれる　文蝶
胸算用二号のそれと喰ひちがひ　紫香
胸算用だけでも赤字つきまとひ　野介
胸算用ピアノのように指を折り　葉光
絲へんは胸算用を上廻り　亞鈍
胸算用銭子の数が解りかね　沐天
胸算用子供の数にちとあはず　梅里
胸算用男だ桁が大きいぞ　紫香
胸算用知つてるだけの顔を入れ　種美
天と地が一つになつた吹雪天の横顔　葉光
借金の知らない吹雪天の横顔　亞鈍

吹雪して電車は畫の灯をともし　豆秋
ロケーション吹雪さまではなつて来ず　古方
缺航の汽笛吹雪の中をつき　葉光
峠から吹雪は違ふ方へ吹き　紫香
恋は盲目吹雪の中の待ちぼうけ　恒明
吹雪々々小説的な二人にし　妄夢
シグナルに頼りきつてる吹雪の夜　文蝶
信心の太鼓吹雪を衝き抜ける　沐天
責任を感じ吹雪を衝いて出る　淡舟
二次会が吹雪となつて酔ひつぶれ　紫香
シンネコは吹雪になつたのを知らず　妄夢
汽罐車の鼻へ挑んでいる吹雪　豆秋
吹きつける雪に裏町死んだよう　愛論
湯ふねから女と見てるいゝ吹雪　小松園
上役を酒でころさん下心　梅里
野心家と言はれ如才ないお世辞　淡舟
野心あり私は若い女です　貴山
野心作何が何やら判らぬ絵　豆秋
髭おいてからの野心は臭くなり　紫香
この家も妻も野心のスケジュール　貞女
自信持つ野心はあれど金のこと　春峯
野心家の胸に香水まだ匂い　文蝶
その野心大言壯語のまゝ終り　沐天
野心おまへんと事務の隅で老い　愛論
野心濤々大きなほらを吹いて去に　恒明
みぬかれた野心きれいな嘘をき・　妄夢
あの頃の野心がリンゴ園に老い　貞女
千円のチップに野心見られたり　豆明
野心から大黒柱ゆがんで来　雑美
六十になつても野心捨て切れず　淡舟
野心まだ捨てず坊主になり切れず　葉光
さゝやかな野心に妻をいとほむ　宣介
水引の下に野心の金の高　小松園

カレンダー渡し今年も儲ける気　鮎美
日めくりをめくり忘れた生活苦　香林
眼帯がとれカレンダーを破る也　鮎美
連休を先に見て置くカレンダー　紫香
さいささはし出發のタクト振る　鮎美
もう発つ氣土産ものやをさきに出　默平
上役の巡診へ出発遅らせる　呑水
出発へ見はお土産へ念を押し　哲水
まつさらのカラー冷た旅立ぬ　紫香
乗りちがへた儘一人生出発し　花村
捨てゝ行く彼女も見える発車ベル　博也
常轉の夫をおくる薄化粧　同
出発へひとりは告知板を書き　万滴
早発ちは竹藪の方ほめ立ててから　鮎美
鐘供養散れ〳〵櫻吹雪がな　古方
鐘一つ時雨れる村へ鳴りわたり　紫香
地にすえたまゝで鈴鐘賣られたり　默平
修学の疲れ忘れて撞いた鐘　默平
一粒の仮はきたなく手でつまみ　紫香
押賣はおムツの下をくゞつて来　鮎美
押賣は男勝りとみて帰り　默平
表札の名を呼び押賣這入つて来　花村
押賣のしぶといのんは子供連れ　紫香
押賣へ最後は父を呼びに来る　万滴

夕刊山陽新聞発刊記念
讀者川柳大会（岡山）
十二月十七日　於　山陽新聞社講堂
藤本　潤年報

新聞

強盗の記事へ新妻大げさな　一歩
新聞に表彰の母小さく出　悠貞女
新聞は僕の喋らぬこともせ　聽夢
新聞の孝女を訪えば藁砧　増一
新聞に出たよい例で説教し　道彦
新聞を一日おいて袋にし　魯公
新聞にだけ出なかつた不孝をし　たゞみ
読んで来た新聞がある控室　呑狂
新聞が闇値の提灯持つてやり　文子
二段抜き三段抜きが斜陽族　貴山
新聞へずばりと汚辱洗われる　鮎郎
新聞で初めて知つた父の趣味　十九平
天皇の記事簡単に扱われ　鉄兒
投稿欄世俗の悪を歎くなり　水声
掃き出す迄夫新聞立つて読み　北斗
新聞に仲よく並んだ両巨頭　十羅

新聞の自由でさえも枠があり　田家翁
照れくさい眼を新聞の上にやり　吉備平
癒つたら読む新聞を溜めて逝き　祝平
戦後派の新聞読めぬこともあり　有樂子
新聞のニュース故郷の雪だより　朝兒
新聞へおつゆのめることを言い　泰秀
ノックする音新聞を持ちかえる　星抱
新聞を気にする議員一言し　竜飛子
初日の出新聞配りはふり向かず　四案
姿宅へ新聞記者が先廻り　麦一
新聞へ美談の主の笑わされ　正一
新聞同姓同名新聞見せに来る　鉄人
新聞で驚がれる迄默つていま　七面山
延着の新聞嵐の記事で着き　正一
三面で小さく死んだ学者なり　四案
不機嫌は今朝の新聞見た社長　祝平
激流に押し流がされて記事になり　三林坊
張紙になつた新聞拾い読み　茶々
古新聞無敵艦隊遊戯す　十羅
官廳は新聞に迄判を捺し　冨至

雑川　**竹原支部句會**（廣島縣）
一月五日　於　福岡葉留路居
黒本　芳泉報

改・新築・一・兎・初詣・松の
内・新聞
改選に色氣があつて忙しい　芳郎

雑川　**北支部句會**（大阪）
一月十八日　於　阪急梅田檢牧所
黒川　紫香報

天神・カレンダー・出発　紫香
おちょやんも天神さんでくじを引き　呑水
酔ざめがお初天神寒うぬけ　正司
梅鉢の額に亡き子の手を探し　一九
連休のプラン組んだりカレンダー　潮花
カレンダーをもろて晦日を戻つて来　默平
カレンダー一つは勉強部屋へ掛け
何をやる日かカレンダーに子のチェック　同

改札は一寸不審な目をむける　可笑
冗談へ女はキッと改り　愛鳩
新築の家にも鎌ヶ犬が居り　賀清
新築へ予算が足りぬ模様替へ　芳泉
新築は火災保険(ホケン)で出来て焼け太り　桃林
家相など言わず新築建つてゆき　葉留路
新築へ父のないのが物足りず　可笑
新築に父祖傳来の床飾り　和郎
一一は名前も呼べぬ子沢山　冨穂
一本の注射に寄鑛待つばかり　芳泉
一も金二も金明け暮れ只追われ　桃林
兎も角も押へて還る年度末　芳郎
毛の取れる兎に生れ生きのびる　芳泉
息子にも一ぱい呑めと松の内　和郎
酔へばとて妻も大目の松の内　葉留路
仕事着へまた身が入らぬ松の内　愛鳩
女房へ不孝の続く松の内　可笑
あれ程の村の騒ぎが二三行　芳泉

川雑　**吳支部句會**（吳市）

十二月七日　於林野　甦光居

裏口・食べ残し・刺戟　紅兒
裏口へ来て内証の声になり　甦光
裏口は二時間早い朝の音　山海
の珍味勿体なく残し　瞳

計画があつて折詰残される　高馬
駐在の平和な村に刺戟なし　千代

川雑　**弓削支部句會**（岡山縣）

十二月二日　於金光教神殿　福島鉄兒報

読む・藝・禿・夫婦・喜び　游子
読み書も出来ず議員の椅子につき　野人
立読みへ小僧はたきを派出にかけ　十九平
唯一人読むには惜しい処生訓　麗甫
貧弱な代理祝詞を急んで去に　十九平
無心狀ながらも嬉し子の便り　笑泉
かくし藝盆笠になりザルになり　巷雨
下戸一人つまらなく見るかくし藝　笑泉
藝のみに生きて不如意の暮し向　野人
藝だけは身につけてゐる居候　桃々
母ちゃんのソブラノも出るかくし藝　游子
藝達者給仕社長の前にいで　喜多八
食べて行く藝と云うのに弟子が来ブ　久米女
かくし藝チャンと用意はして来ぶり　弓削平
かくし藝前置程の声でなし　一貫
家元は枯木一本活けたゞけ　弓削平
十も歳損する程の禿となり　朗笑
どの人と問はれて禿と教えとき　ラッキー
肩書のついた名刺に似合う禿　弓削平
若禿のおじぎ帽子に触れたゞけ　久米女
若禿へ孫があるかとたずねられ　游子
夫婦けんか子供火の付く声を出し　朗笑
一人子の入学夫婦附き添うて　一貫
夫婦けんか猫を犠牲にしてしまい　夢成
三夫婦があふれ出そうな家に住み　奇童
喜びを分けおうて食う祝い餅　老骨
喜びの便り遠縁まで届き　鉄兒

川雑　**備前支部句會**（岡山縣）

忘年会　於娯句樂居

十二月二十三日　大森苑女報

鉄瓶・腕前・蔭口
鉄瓶も光り床柱も光り　苑女
初産に産婆の腕が楽ぜられ　美秋
腕前を信じて母は静かに居　柳風子
一理窟ある蔭口をほめており　清春
花嫁へもう蔭口のあつかまし　柳風子
箒杖にして蔭口をまだ続け　美秋
蔭口にうまを合わしたのを悔み　久米雄

川雑　**大牟田支部句會**（大牟田市）

一月十九日　於三染人事課　富田一葉報

生娘・ふとん・電話口・赤字・
物忘れ・主張　游子
生娘でおれぬ勤めとやつと知り　ツネオ
めくられる迄は狸寝する心算　同
去年から敬いた布團で寝正月　掬邊
娘の話変に沈んだ電話口　同
電話口僕が聞いてるとは知らず　鶴堂
電話口出れば隣を呼んでくれ　ツネオ
祝詞の諳がもれる電話口　掬邊
電話口殺氣立つてもこわくなし　坂口
金策に声を落して電話口　掬邊
経営の赤字世相の性にする　坂口
税務所に氣の毒な程赤字なり　扇波
新家庭赤字は郷へもつてゆき　一葉
赤字〳〵もう質草も枯れかゝり　掬邊
追つかけて母がさし出す弁当箱　十時
物忘れもう叱られぬ年となり　鶴堂
P・T・A女の主張あなどれず　掬邊
法延で涙の主張容れられる　同

川雑　**姫路支部句會**（姫路市）

一月三日　於燕子居・一笑報

雑煮・兎
故郷の雑煮の味がなつかしく　燕子
雑だ煮け祝つて元旦寝てしまひ　同
年の数を食べるんだと中休み　孤笑
屠蘇汲んで雑煮の餅があまつて来　一笑
耳長く書いて兎のやうに見え　和水
三ケ日兎の草も取つて置き　一笑

不朽洞

会から

▼戸倉普天氏（兵庫縣）は一月十四、十五日の両日南紀游、那智を廻り勝浦の越の湯に一浴され、「柴刈りの渡しで行くも熊野川」の句情を寄せられた▼石岡正司氏（兵庫縣）は元旦早々厳父の危篤の報にいそいで郷里滋賀縣日野町に帰國されたが、一月三日夕刻六十八才で永眠されたとのこと、謹んで悼む▲佐野卜占氏（八代市）は昨年一月帰省されたので、本年は令閨と令嬢を帰省させ留守番役なので、葭乃女史が「漬物は出さぬ仕舞いの妻の留守」の句で慰めると「妻の留守漬物だけで友と呑み」の返句を寄せられた▼山根白星氏（高岡市）は三月まで青森縣へ出張、旅館へ滞在されている。特別寒むがりだそうで積雪二尺に脅威を感じていられるらしい▼布施筑川博士（國立大阪病院副院長）は十一月八日附で、阪大名誉教授に就任された▼大森風來氏（岡山縣）はハワイタイムスの新春の川柳に、令閨よしえ、令弟北星の三人で應募され、北星氏が天位で布哇タイムス賞、風來子夫妻は十秀に入選された。日本からの應募はこの三人きりだった▼大西迷窓氏は二月一日から、香川縣詫間永康病院へ轉勤されたが、土曜日曜には岡山へ帰られるとのこと▼櫻川不水氏（下関市）は鉄道弘済会に勤務されたので、半休門氏ともよく会合され、川柳に捲土重来されることとなつた▼村松夢裡氏（京都市）は大鶴喜山氏と相談の結果、二月十八日に京都支部創立下準備の小集会を開かれるとのこと▼中島生々庵氏（本会理事長）は二月七日夜、中島診療所で理事会を招集された。

新会員紹介

二　月

延永　忠美氏（岡山市）正
満年氏推薦
米田　孤舟氏（大阪市）正
地俱山風楼氏（吹田市）正
鮎美氏推薦

三　月

淡畑　胡蝶氏（大阪市）正
淡舟氏推薦

高級化粧料容器には勿論！
ヤマキンの……
黒硝子
大阪市大阪區長堀西通一丁目四西
山銀株式會社
電話堀川四四七番

編輯室にて

★寒さはなか〳〵に厳しいが、編輯局一同はハリキッテ不断の努力を続けている。号を逐うていゝ雑誌にしたい。それ以上の野望はない。御支援を切に祈る。

★本号の表紙も由比種三郎画伯を煩した。前号の「火鉢」も素派らしい出来栄えであったが、本号は更に出色のものである。

★従来「近作柳樽」の作品発表には府縣市別で単に雅号だけを用いていたが、前号から姓も組み込むことにした。

★リレー随筆は何れも健筆揃いでなか〳〵評判がいゝ。次は誰？次は誰？もう自分の方え廻って来そうなものだと、鶴首している人さえあると聞く。本号えの寄稿は仙台の浜夢助氏で、次号の執筆者は浜氏の指名で、清水市の三橋臥竜洞氏である。サテどんな名随筆となってあらわれるか。

★本号から「不朽洞の喫煙室」を発表することにした。不朽洞会員の云いたいことを云うページである。投稿規定は不朽洞会総会の案内ハガキの下段に刷っておいたから参照されたい。

★福田山雨楼氏の「川柳原理」は氏が多年のウンチクを傾けて執筆されたものである。味読されたい。

★山路閑古氏の小説「將軍娘」は柳誌の紙價を高からしめるものとして好評である。

★「山焼川柳大会」の記は種瓜平氏得意の漫筆であり、あわせて氏の漫画を配したところ氏の独壇上と云えよう。遙かに三笠山を指さされる高田十郎先生の講演委態もさることながら一隅で英氣を養う浪食子氏の樂屋落もほゝえましい。

★掲稿「新川柳評釈百句」は一般購読者が川柳の解釈上の参考資料としてよろこばれている。その意味から云っても出来るだけ平易に書き続ける積りである。（路）

―動　靜―

▼本社二月句会は三日午後五時半から大宝文化会館で開催された。遠来柳人の参加もあつて盛会だった。▼川雑南支部句会は二月十四日午後六時から阿倍王子神社で開催▼大阪逓信病院川柳会は二月十七日午後二時から三階図書室で開催▼南区医師会川柳同好会は二月廿日午後七時から松竹座裏の鳥耕居で開催▼南海電鉄川柳会は二月廿四日午後一時から南海高等学校で開催▼川柳一路会は二月十日午後二時から高島屋飯田株式会社で開催以上何れも路郎主幹出席▼川雑ハワイ支部（ホノル、）では一月廿六日に東雲別荘で新年句会を開催された▼川雑竹原支部（廣島縣）の一月五日の新春句会の探防記事が十日の朝日新聞の廣島版に紹介された。なお二月八日には葉留路居で支部句会が開催され、廣島中央放送局が句会え出張録音となり十日に放送されることとなつた▼川雑姫路支部では二月十日に武田孤拳氏社堂の追悼句会を開いた由▼川雑岡山縣脆支部句会が二月三日事務課別室で開催された▼川雑下関支部では二人の商工会議所議員改選に際し、文化部議員として高橋かうたろ氏、藤井赤とん坊氏を推すことになつたので多忙をきわめているとのこと、なお四月には下関駅長が市長に立候補するのでこれ又多忙が予想される▼牛耳洞吟社（山口縣）では二月三日沖宇部晴風寮で小集を開催▼「川柳と漫画」の座談会を一月廿二日午後六時から川雑千日前連絡所で開催した。会するもの路郎、鮎美　豆秋、玲之介、晴峯、瓜平、猪飼（ゲストとして大阪日日文化課長）の諸氏▼川柳ながさき創刊一周年記念川柳大会が長崎川柳社主催で一月廿一日に長崎市大音寺籠町市営旅館万歳で開催された▼水戸観梅川柳大会が三月十一日午後一時から水戸市常盤神社社務所で開催、主催は水戸市観光協会、水戸観梅川柳全國大会運営委員会▼木村草々氏が句集

川雑大牟田支部
雪見舞　高田抱逸
大牟田市瓦町二四

「桐の雨」を二月五日にプリントで刊行、亡妻已代子さんの霊に捧げられた。（大阪市生野区猪飼野中一丁目一條市場内）

▼野村味平氏は昭和印刷を退職後、石川縣大聖寺局区内坊ケ法一四栗山知十氏方へ移られた▼二八四号の八頁上段二七行目「冗談に」の句は抹消する

風趣豊かな
お嫁様の宿
おなじみの「食道樂街」七階
◇てんぷら◇とんかつ
◇中華料理◇お酒
◇ビール◇フルーツジュース
（外食券食堂）
甘樂茶屋「甘樂」開殷
松坂屋
大阪日本橋

最短時間で結ぶ
大阪―名古屋
3時間特急
毎日3往復
指定制
特急料金 ¥60
上本町發 7.40 13.40 16.40
名古屋發 8.00 13.00 17.00
近畿日本鉄道

Made in Occupied Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第六卷　第三号
（禁轉載）
一冊　金三〇円（送料三円）
半ケ年概算　金一九八円
一ケ年概算　金三九六円
昭和廿六年一月廿五日印刷
昭和廿六年三月一日発行
大阪市住吉局区内万代四五丁目二番地
印刷人　麻生幸二郎
発行所　川柳雑誌社

募集

課題吟募集

お経（十句）戸田古方選
ホテル（十句）吉田水車選（三月廿五日締切）
街路樹（十句）福田山雨楼選
クーポン（十句）市場浚食子選（四月廿五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雅吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。